棚倉町歴史文化基本構想



平成31年3月福島県棚倉町

棚倉町歴史文化基本構想

目 次

第1章	棚倉町歴史文化基本構想の策定にあたって	
1	策定の背景と目的 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	1
2	構想の位置付け ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	2
3	策定の体制及び経緯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	4
第2章	棚倉町の概要	
1		5
2	社会環境 ·····	8
3	歴史 · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	11
4	棚倉町の食文化 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	17
5	棚倉町の代表的な文化財・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	19
6	棚倉町の歴史文化的特徴・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	26
第3章	文化財の状況	
1	指定文化財	28
2	未指定文化財 · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	28
3	棚倉町における文化財把握の取り組みと成果 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	29
4	文化財の把握・保存・活用の課題 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	31
第4章	文化財の把握・保存・活用の方針	
1	文化財を " 発見する "・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	34
2	文化財を " 守る " · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	34
3	文化財を " 伝えていく "・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	35
4	文化財を"知る・楽しむ"・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	35
第5章	関連文化財群	
1	関連文化財群の考え方・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	37
2	棚倉町の関連文化財群・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	37
3	関連文化財群の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	38
第6章	基本構想実現へ向けた体制整備	
1	基本構想推進の各主体の役割・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	56
2	推進の体制 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	56
3	今後の課題 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	57

現在までの文化財の活用事例

第1章 棚倉町歴史文化基本構想の策定にあたって

1 策定の背景と目的

文化財とは、人間の様々な時代背景の中で、人々の生活や風土との関わりにおいて生み出され、現在まで守り伝えられてきた貴重な財産である。

我が国の文化財保護政策は、昭和25年(1950)に制定された文化財保護法(昭和25年法律第214号)に基づき、文化財の保存と活用のための措置が講じられている。保護の対象は、有形文化財、無形文化財、民俗文化財、記念物、文化的景観、伝統的建造物群という6種に分類している。ほかに土地に埋蔵しているものを埋蔵文化財、伝統的な技術・技能を保存技術と呼び、保護の対象としている。

これまで、文化財は、地域の歴史や文化を認識させ、魅力あふれる豊かな地域づくりの礎となり、コミュニティーの活性化に寄与するものとなってきた。

しかし、私たちを取り巻く社会状況は急激に変化し、過疎化・少子高齢化の進行により地域の 衰退が懸念されている。これは伝統や文化の消滅の危機であり、文化財は、未指定のものも含め、 開発・災害等による消滅の危機のみならず、文化財継承の担い手の不在による散逸・消滅の危機 にも瀕している。また、これまで価値付けが明確でなかった未指定の文化財も対象に含めた取組 みの充実や、文化財継承の担い手を確保し社会全体で支えていく体制づくりや、新たな取り組み が求められている。

当町では、平成26年(2014)に平安時代の山林寺院である「流廃寺跡」が国指定史跡に、中世の建造物である都々古別神社本殿が国重要文化財に指定された。この指定を契機として、町民が身近な文化財を見つめ直す機運が高まり、歴史と文化を活かした新しい町づくりの一つとして「町まるごとミュージアム」事業を実施した。

この「町まるごとミュージアム」とは、地域の歴史的遺産、文化的遺産、産業遺産、自然遺産を地域住民の宝として残し、守り、地域住民や多くの人々に伝え、地域資源をネットワーク化することによって地域の活性化を図り、住民の地域資源を再確認するきっかけづくりの一つとなることを目的としたものである。町長により宣言された「新棚倉藩物語宣言」にある「先人たちによって伝えられてきた、歴史と文化遺産の保存・継承・再生に積極的に取り組み、文化の向上、郷土愛の醸成、地域の活性化を図り、棚倉町の魅力を発信して行きます」に基づき、現地での文化財公開、歴史講座、伝統文化体験等を3年間(平成27年度~平成29年度)にわたり実施したが、文化遺産の保存と継承、地域活性化の面でさらに発展させる必要があり、新たな取り組みが求められた。

こうした背景をふまえて、地域固有の歴史文化を守り、地域の活性化と魅力の増進に活かすことを目的として本構想を策定するものである。

2 構想の位置付け

(1) 歴史文化基本構想とは

「歴史文化基本構想」は、「文化審議会文化財分科会企画調査会報告書」(平成19年(2007) 10月30日)においてその策定の重要性が提言された、地方公共団体が文化財をその周辺環境まで含めて保存・活用していくための基本構想である。

平成24年(2012)2月に文化庁文化財部から出された『「歴史文化基本構想」策定技術指針』では、「地域に存在する文化財を、指定・未指定に関わらず幅広く捉えて、的確に把握し、文化財をその周辺環境まで含めて、総合的に保存・活用するための構想であり、地方公共団体が文化財保護行政を進めるための基本的な構想となるもの」であり、「文化財を活かした地域づくりに資するもの」と定義している。

このように、これまでの文化財保護行政は、指定等を受けている文化財の保護・保存を主としていたが、今後は、指定等を受けている文化財だけでなく、指定等を受けていない文化財、さらにはそれらの周辺環境も含めた保存・活用を推進していくという大きな方針転換を行うための指針が「歴史文化基本構想」である。

(2) 棚倉町歴史文化基本構想の位置付け

平成27年(2015)3月に策定した「第6次棚倉町振興計画」(計画期間:平成27年度~平成36年度)では、目指す将来像を「人を・心を・時をつなぐ たなぐらまち」と定め、3つの基本理念を掲げている。このうち「誇りと愛着のもてるまち」では、「文化・芸術活動の振興」の主要施策として、「郷土文化の保存と継承」「歴史や文化資源の活用」が挙げられている。さらに重点施策として「歴史や文化的資源の活用を図り、まちの魅力として広く発信します」と明記している。

また、「第6次棚倉町振興計画」をもとに、棚倉町教育委員会では教育振興のための施策に関する基本的な計画として「棚倉町教育基本計画」を策定している。この教育基本計画では、「将来を担う人材と文化を育むまち」を基本理念に、歴史文化に関する内容については、「第6次棚倉町振興計画」と同じ内容を基本施策として位置づけている。

このように「棚倉町歴史文化基本構想」は、「第6次棚倉町振興計画」並びに「棚倉町教育基本計画」の理念と目標を実現するための計画であり、関連計画との連携と調整を図ることにより歴史文化の側面から各施策の推進を支えるための構想である。

① その他の計画等の関係

1) 環境省選定「重要里地里山|

当町関口・流地区にまたがって範囲が設定されており、当地域には、アカマツ林・コナラ 林など見通しの良い二次林が残ること、水田・ため池など土地利用が形成・維持されている こと、里地里山に特徴的な動植物が確認されていることなどから、生物多様性保全の拠点と みなされ、平成27年(2015)12月に「重要里地里山」に選定された。

「重要里地里山」は国土の生物多様性保全の観点から重要な地域を明らかにし、多様な主体による保全活用の取り組みを促進されることが目的とされ、この計画に伴って新たな制約や規制等を発生させるものではないが、この地域が多様で優れた二次的自然環境を有し、里地里山に特有で多様な野生動植物が生息・生育する点に留意し、本構想と連携が取れないか問われている。

2) 棚倉町都市マスタープラン

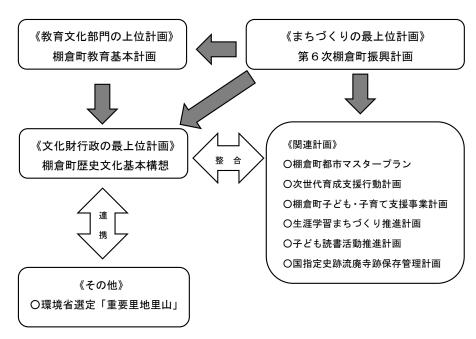
平成8年度に策定された「棚倉町都市マスタープラン」では、都市づくりの方向性として2つ揚げている。

- ・「ゆとりと豊かさを真に実感できる人間居住の場としての都市整備」 (「住める」という次元から住むことの満足や誇りが持てる都市づくりの視点の必要性)
- ・「個性的で快適な都市づくり」 (自然的な条件、歴史的な条件など都市が持つ固有の諸条件を最大限に生かした視点の必要性)

この2点の方向性に則った都市づくりを目指すため、本構想で文化財の保存・活用の方 針を策定する。

3) 国指定史跡流廃寺跡保存活用計画

「国指定史跡流廃寺跡保存活用計画」は、国指定史跡「流廃寺跡」の現状・課題として、 周囲の平坦面から約80mの丘陵に立地するという特性と、土砂崩落等の災害の恐れ、継続 した発掘調査の必要性、豊かな山林の自然環境の保持が挙げられている。そうした史跡の特 異性を踏まえつつ、計画においては 流廃寺跡の本質的価値を明らかにし、保存管理の方法 や内容確認の発掘調査、追加指定、土地の公有化、整備活用、管理運営、取り扱い基準等の 基本的な考え方を示している。



3 策定の体制及び経緯

町内にある多彩な歴史文化の特徴を的確に把握し、町民にわかりやすく共感できる構想として まとめるため、学識経験者、文化財保護関係者等の8名で構成する「棚倉町歴史文化基本構想 等策定委員会」を設置して検討を行った。

委員会は平成28年(2016)12月21日の第1回委員会を皮切りとし、6回の委員会を開催した。 委員会での協議を受け、町内の文化財を把握するための調査とこれまでの調査歴についての整理 作業を開始した。さらに、庁内向けの説明会及び町民向けの説明会として「歴史文化基本構想講 演会」を開催した。また、町の文化財展を利用して、アンケート調査も実施した。

表 1 棚倉町歴史文化基本構想等策定委員

氏名	職名等	備考
菊池 健策	都留文科大学非常勤講師	民俗
高橋 恒夫	東北工業大学名誉教授	建築
時枝 務	立正大学教授	考古
	流廃寺跡調査指導委員会副委員長	
北野 博司	東北芸術工科大学教授	考古 (城郭)
	棚倉城跡調査指導委員会委員長	
高橋 修	茨城大学教授	歴史
山崎 祐子	学習院女子大学非常勤講師	民俗
菅原 海淳	棚倉町文化財保護審議会長	
石井 貞子	棚倉町商工会女性部長	

専門部会 調査員

考古 大山 悟、畠山 真一、滝沢 勇馬、斎藤 治樹、大風 雅明

中世 須貝 慎吾、大山 恒、古寺 恵、佐藤 湧太

近世 阿部 祐也、橋本 哲史、有馬 花苗

近現代 作間 亮哉、金澤 大樹、杉浦 果奈

民俗学 岩崎 真幸、古屋 知宏、亀田 総一朗、村上 輔、三浦 直貴、小瀧 慧悟、

神子島 奈々

建造物 小林 直弘、中村 琢巳、保志 優太、阿部 竜生、関本 維凌、佐藤 啓斗

米田 一、奈須野 翔哉

天然記念物 藤田 和孝

芸術文化 田中 望、庄司 貴博、木見尻 郁弥



委員会の様子

第2章 棚倉町の概要

1 位置、地勢

(1)位置

当町は、福島県の南部、東白川郡の北部に位置し、県庁所在地である福島市から南へ約94km、東京からは約200kmの距離にあり、東北地方の南端で関東圏内から比較的近い位置にある。町の東側は鮫川村・浅川町、西側は栃木県那須町・同大田原市、南側は塙町・矢祭町・茨城県大子町、北側は白河市と接し、総面積159.93km、東西約19km、南北17.4kmとなっている。

町内には JR 郡山駅と茨城県 JR 水戸駅を結ぶ JR 水郡線が通っており、磐城棚倉駅・中豊駅・ 近津駅の3つの駅が存在し、なかでも磐城棚倉駅が町の主要な駅となっている。

基幹道路としては、国道 118号・289号などが通っており、それに加え、交通バスに関しては当町と白河市とをつなぐ JR バス関東と白河市・塙町・矢祭町をつなぐ福島交通が運行している。



図1 当町の位置

(2) 地理・地形

当町は、福島県中通り南部に位置し、東白川郡の北西部にあたる。福島県は東部の阿武隈高地と中央の奥羽山脈とにより三分され、山脈を隔てて浜通り・中通り・会津のそれぞれ三つの地域に分けられている。当町はその中通りの本県最南端に近い地域となっている。

町の東部には阿武隈高地が連なり、西部は八溝山地に囲まれ、中央に久慈川が通り、市街地は 久慈川谷低地(八溝地溝帯)が形成されている。また当町は福島県中通りとしては珍しく、阿武隈 水系ではなく久慈川水系に含まれており、地域的なまとまりとしては茨城県に近い様相を持って いる。また、当町には、東北、西南日本の地質を二分する破砕帯がり、この破砕帯を「棚倉破砕 帯」といい 東北最大の構造線に一致すると言われている。



図2 当町の地形図

(出典:国土地理院ウェブサイト)

(3) 気候

当町(東白川郡)の気候は、おおむね太平洋型気候で、東北部の冷温帯気候に属すが、久慈川流域の温暖な気候の影響もあり、積雪量は少なく四季を通じて比較的温暖な気候となっている。そのため年平均気温は11℃程度であり、年平均降水量は約1,400㎜で、全国平均約1,700㎜より少ない傾向にある。また、梅雨時期から台風時期にかけて降水量が多く、6月から9月の4か月で年降水量の50%に達している。

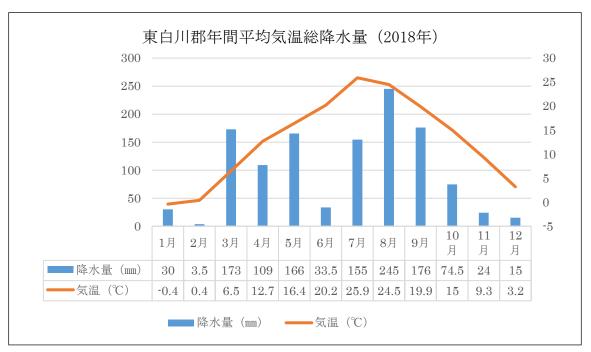


表2 東白川郡の年間平均気温及び総降水量

(気象庁ホームページ 気象統計情報より作成)

2 社会環境

(1)人口

当町の人口は、昭和 30 年(1955)の町村合併時には国勢調査人口において 19,443 人を数えたが、その後は年々減少し、昭和 50 年(1975)には 16,059 人へと減少した。その後、町内への企業誘致等により平成 2 年(1990)には 16,606 人へと一時増加傾向となったが、近年また減少傾向にあり、平成 27 年(2015)では 14,302 人となっている。また、人口予測によれば、2034 年には 10.115 人まで人口が減少するものと考えられている。

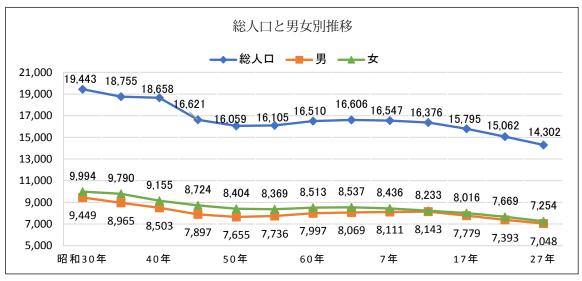


表3 総人口と男女別推移

(資料:各年国勢調査)



表 4 人口予測

(資料:第6次棚倉町振興計画)

(2) 産業・特産品

当町は、第1次産業である農林業を基幹産業としているが、産業別人口比率の推移をみると、第1次産業 第2次産業が減少傾向にあり、第3次産業が増加傾向にある。平成27年(2015)の比率の推移をみると、第1次産業は10.2%、第2次産業は41.8%であり、第3次産業は48.0%と50%台に迫ろうとしている。

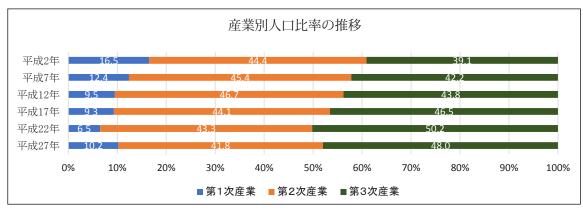


表 5 産業別人口比率の推移

(資料:第6次棚倉町振興計画)

主要生産物としては、米やそば、こんにゃくなどがあり、近年はブルーベリー生産・加工 販売にも力を入れ、ジャムなどの商品が作られている。また こんにゃくに関しては『東白川郡沿革私考』によれば、「本郡益産出遠近に輸出し国産の随一となる。」とあることから古来より盛んに生産されていたことがわかる。また工業については、ベアリングやサニタリー製品等の企業が進出していることから、製造業が当町の産業の約32%を占めている。

作目名	*	そば	こんにゃく	かき	トマト	馬鈴薯	大豆	肉用牛頭数
作付面積	820ha	18ha	11ha	2ha	1ha	1ha	1ha	1,076頭

表 6 主要生産物作付面積

(資料:平成30年度棚倉町の概要)

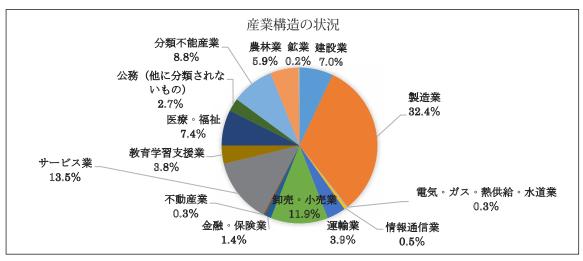


表7 産業構造の状況

(資料:第6次棚倉町振興計画)

(3)交通

要な道路となっている。

当町は、古来から奥州への入り口としての役割を持つ土地で交通の要所として栄えてきた。当町を通る基幹道路としては国道 118 号線・289 号線があり、国道 118 号線は水戸市から大子町を通過し、当町を南北に通り石川町から会津若松市までつながる関東と東北を結ぶ街道として古くから発達してきた。国道 289 号線はいわき市より当町を東西に通り、白河市・只見町を結んでいる街道であり、この 2 つの国道は他地域から当町の中心まで繋ぐ、町民の生活に欠かせない重

鉄道は、当町を南北に縦断する水戸市と郡山市を結ぶJR水郡線が運行している。昭和19年(1944)まで鉄道として運用していた白河市と当町を結ぶ白棚線は、現在JRバス白棚線として現在も運行している。水郡線及び白棚線は、主に通学の足として利用されている。また、他に東白川郡内と当町と白河市を結ぶ福島交通バスもあり、農村地域から中心地を繋げる大切な交通機関とされている。



(4) 観光

当町は、豊かな自然と歴史が織りなす町であり、棚倉城跡に存在する亀ケ城公園をはじめ、花園のしだれ桜、赤館公園、常隆寺は、町内外の人々が花見を行う桜の名所としても有名な場所である。 秋には山本不動尊や棚倉城跡、八溝山などが紅葉の観光スポットとして親しまれ多くの観光客が訪れている。

また、「東北の小京都棚倉」と呼ぶように、歴史や文化も魅力的であり、馬場都々古別神社や八 槻都々古別神社、山本不動尊、蓮家寺など古くからの神社・仏閣が存在している。それだけでなく、 棚倉城跡を中心とした城下町の風情を楽しむことができる。

他にもリゾートスポーツプラザ「ルネサンス棚倉」は、学生の部活動やサークル活動の合宿所などとして多くの利用客が訪れるとともに、町文化センター「倉美館」においては、多種多彩なイベント・催し物が開催され、町民だけでなく福島県内外からも多くの人々が来場する施設でもある。



赤館の桜



馬場都々古別神社の紅葉

3 歴史

(1)年表

和曆	西暦	東白川 棚倉の歴史
711/10	12/13	高渡遺跡 縄文時代中期~後期の集落跡
		「
		産 工 時代後期でが主時代中期の遺跡(「伽眉八工品」) 松並平遺跡 縄文時代~平安時代の集落跡
	6世紀前半	
美 老 0 左	718	胡麻沢古墳 古墳時代後期の古墳
養老2年 神亀年間	$724 \sim 729$	石城国、陸奥国より分置 宇迦神社創建
天平9		常降寺建立
	73	1
大同	07	馬場都 古別神社創建 山本不動尊開山
弘仁2年	811	東海道白河延長路が開通。長有・高野に駅が設置される
ナルトケ	9~10 世紀	流廃成立
文治5年	189	源義経重臣鈴木三郎重家、「紀州熊野花園大権現」の石仏を彦六に与える
- <i>6</i>	1338	足利尊氏 室町幕府を開く 中国社会室室 医液分母 東京沙石 大山 教育 持
元亀年間	1550	白河結城家家臣深谷伊豆守治行、寺山館築城
天正元年	1573	
天正3年	1575	佐竹氏、白河結城氏と戦い赤館を領有
天正 17 年	1589	
天正 18 年	1590	
慶長8年		徳川家康、江戸幕府を開く、蓮家寺開山
慶長 11 年	1606	
元和8年	1622	
寛永 2 年		
寛永4年	1627	
寛文5年		内藤信良、棚倉城主となる
寛文 12 年	1672	_
延宝2年	1674	3
宝永2年		太田資晴、駿河田中(静岡県)より棚倉城主となる
宝永4年	1707	
享保 13 年		松平武元、上野館林(群馬県)より棚倉城主となる
延享3年	1746	静
寛延2年	1749	
安永 4 年		小笠原長堯、棚倉城主となる
寛政 10 年	1798	
文化9年		な
文化 14 年	1817	岡と
文政3年	1820	3
文政7年		常陸大津浜に英国船が上陸、棚倉藩陣屋を設け警備を行う
天保7年	1836	根と
嘉永7年	1854	<u>\$</u>
文久2年		\$
治元年		天狗党鎮圧のため、棚倉・江戸屋敷より派兵

		東白川・棚倉の歴史
慶応2年	1866	阿部正静、棚倉城主となる
慶応4年		
明治2年		
明治4年	1871	棚倉県ができる(後に平県に編入)
明治6年		
明治9年		
明治 12 年		
明治 18 年		
明治 22 年	1889	町村制施行(棚倉町・社川村・高野村・近津村・山岡村の1町4ヶ村)
明治 23 年	1890	
明治 33 年	1900	
大正2年	1913	
大正 10 年	1921	
昭和9年	1934	水郡線全線開通
昭和 20 年	1945	
昭和 30 年	1955	
昭和 32 年	1957	
昭和 43 年	1968	
昭和 45 年	1970	国道 289 号が制定
昭和 47 年	1972	
昭和 58 年	1983	
昭和 61 年	1986	
平成2年	1990	
平成3年	1991	スパルタ市民公式訪問
平成6年	1994	
平成7年	1995	
平成 14 年	2002	
平成 16 年	2004	
平成 18 年	2006	「阿部正備茶室」町有形文化財指定
平成 20 年	2008	
平成 23 年	2011	
平成 24 年	2012	
平成 25 年	2013	「八槻家住宅」県重要文化財指定
平成 26 年	2014	
平成 30 年	2018	
平成 30 年 平成 31 年	2010	
十成31年		

(2) 古代

当町を西から南へ流れる久慈川は、奥久慈の最高峰である八溝山(標高 1022 m)を源流とし、その流れは遠く常陸(茨城県)を通り、太平洋へと至る。

この久慈川沿いを中心として、当町には原始・古代より多くの遺跡が確認でき、古くから人々が生活していたことがうかがわれる。縄文時代には中期から後期の遺物が数多く出土した高渡遺跡などいくつかの遺跡があり、弥生時代の遺跡では標識土器の「棚倉式土器」が出土した崖ノ上遺跡が有名である。また、古墳時代には石室から人骨や骨鏃が出土した胡麻沢古墳のほか、塚原古墳群、堤古墳群などがある。

奈良時代になると、遺跡のほかにも古文書や古記録によって人々の生活を知ることができる。この時期の代表的な遺跡は、大規模な集落跡である松並平遺跡や、東北における古代仏教の一拠点である国指定史跡の流廃寺跡である。弘仁2年(811)に当町を含む東白川郡に長有・高野の2駅が設置され、常陸国から陸奥国に至る官道が設けられる。これにより陸上交通が整備され、既に存在した久慈川の水上交通に加えて交通量の増大を当町にもたらした。

平安時代の中期に編さんされた辞典である『倭名類聚抄』によれば、当町を含む東白川郡一帯が「高野郡」という行政区分で呼ばれていたことが分かる。この時代に当町は「入野(伊野とも)」と呼ばれていた。さらに歴史書である『続日本後紀』や古代における法典集の『延喜式』を紐解くと、この頃に都々古別神社(現在の馬場・八槻都々古別神社)が



棚倉式土器

成立したとされ、当時は、非常に高い格式を有し、その勢力は大変大きく、神事などの費用にあ てるための神領として、鎌倉時代まで高野郡全域を直接支配するほどであった。

(3)中世

中世になると、山林を中心に修行を重ねる修験者による独特な宗教文化が形成される。修験道は、山林に入り修行を積むことで呪力を体得することを目的とした神仏混合の民間宗教で、馬場・八槻都々古別神社などが中心となり、東北における一大宗教拠点となっていった。一方で政治の面では、白河結城氏が高野郡の地を治めるようになる。白河結城氏は平安時代の末の奥州合戦の功績から白河郡を恩賞として賜って以後、鎌倉幕府との関係を密にしながら支配体制を固めていた有力氏族である。その支配は長きに及び、戦国時代になると常陸より侵攻してきた佐竹氏といった他の有力氏族との激しい戦闘が繰り広げられた。この頃周辺の山々では中丸館や赤館、寺山館といった館や山城が次々と築かれた。

(4) 近世

江戸幕府の成立後の慶長 11 年(1606)に、立花宗 茂が赤館城主として初代藩主となり当地を治めるこ ととなる。宗茂は、馬場・八槻都々古別神社の朱印 状取得に尽力している。元和8年(1622)に、新た に藩主となった丹羽長重は寛永2年(1625)に棚倉城 を築城した。長重は、周囲の地形より高い久慈川の 河岸段丘に立地していた馬場都々古別神社の境内に 着目し、神社を現在の社地に遷宮して新規築城した。 天然の要塞のような地形が城を造るにあたり絶好の



棚倉城跡(国指定史跡)

場所であり、古代から続く都々古別神社が宗教権威として民衆まで大きな影響力を持っていたことを利用したとも考えられている。

また、内藤家の藩主時代には、城下町の整備も進み、水戸街道、平潟街道、奥州街道、伊王野道等が通る交通の要衝としての地位を確立した。寛永6年(1629)に紫衣(しえ)事件が発生すると、京都大徳寺の住職を務めた玉室宗珀は流罪となり、棚倉藩へ預かりの身となった。当時の藩主内藤信照は赤館城跡の南麓にあった光徳寺境内に庵を設け、手厚く世話を行い、親睦を深めたとされている。

以後、棚倉藩の統治は内藤家(3代)、太田家(1代)、越智松平家(1代)、小笠原家(3代)、井上家(2代)、松井松平家(4代)と続き、最後は阿部家(1代)であった。

歴代藩主は、領内の寺社仏閣を手厚く庇護しており、内藤信照は光徳寺を建立、太田資晴は長 久寺へ棚倉城の南門を寄進、松平康爵は山本不動尊へ石灯籠の寄進を行っている。

(5) 近代

① 戊辰戦争と明治維新

慶応2年(1866)、白河藩主の阿部正静が棚倉藩主となる。慶応4年(1868)、棚倉藩は奥羽越列藩同盟の一員として戊辰戦争に参加する。白河小峰城の攻防戦において、棚倉藩は阿部内膳率いる「十六ささげ隊」などが活躍するも白河小峰城は落城する。

白河小峰城が落城すると新政府軍は攻撃目標を棚倉藩に定め、板垣退助が率いる薩摩藩・長州藩・土佐藩・忍藩・大垣藩らの兵約800人が棚倉城へと進軍した。一方、城には前藩主阿部正外が率いるわずかな手勢がいるのみであり、仙台藩・三春藩等の援兵が得られなかったため、正外は落城必至と考え、新政府軍の拠点になることのないよう城に火を放ち、分領へと逃れた。その後、新政府軍は城下に進駐し、板垣は蓮家寺を本拠とし民政にあたる。

明治時代に入り、戦乱後の当地域は少しずつ復興を遂げる。明治2年(1869)、版籍奉還が行われると阿部正功が藩知事となり、明治4年(1871)、廃藩置県が行われると棚倉藩は廃止され棚倉県として新たに行政機構が整えられていった。その後は、明治9年(1876)、福島県へ編入、明治22年(1889)町政開始と行政機構が整理され、東白川郡域の中心として機能していくこと

となった。

明治2年(1869)9月2日、当時の棚倉藩知事であった阿部正功は、戊辰戦争後に藩士等の子弟を教育することを目的として、旧白河藩校と同名の藩校「修道館」を設置し、文武両道に分かれて教授した。分校(郷校)が5か所あり、生徒の概数は寄宿生20名、通学者200名、分校150名であった。教科書と諸規則は白河藩校時代と同じと伝わる。毎月一度、試験を行い、学力により一等から四等まで級別に区分していた。明治4年(1871)10月、当町が平県の管轄となった時に廃校となるが、その後、明治5年(1872)の学制発布と同時に、修道館の講堂跡を校舎として修道小学校が開校し、明治6年(1873)に棚倉小学校と改称し、現在に至っている。

② 棚倉町の近代化

東白川郡の中心となった当町は、近隣町村に比べて近代化が進んだ地域と言える。産業面では、明治21年(1888)に棚倉製糸会社、明治34年(1901)には上台葡萄酒醸造株式会社が発足したが、赤字経営が続き大正年間には廃業している。また、石炭が瀬ケ野区と小爪区の炭鉱において採掘が行われており、第2次世界大戦直後まで採掘されていた。金融面では、明治12年(1879)に棚倉協同株式会社、明治23年(1890)に棚倉銀行が創立されており、前者は現在の東邦銀行につながるものである。



磐城棚倉駅

交通の面では、大正5年(1916)に白棚軽便鉄道が営業を開始した。しかし、昭和7年(1932)に大郡線(後の水郡線)が当町まで敷設されると、白棚線は経営悪化に拍車がかかることとなり、昭和11年(1936)に政府借上、昭和19年(1944)にレール撤去となった。現在、白棚線の軌道跡はJRバス関東白棚線の一部専用道路となっている。

(6) 現代

満州事変以後、町内でも戦時体制が強化され物資統制などが進む中、昭和 15 年(1940)の大火により、町内の約 200 戸が焼失した。また、戦後は進駐軍による農地改革により、経済界の再編成が行われ、昭和 20 年代は棚倉簡易裁判所、東白川地方事務所、棚倉税務署などの行政機能を整えていく。

昭和30年(1955)1月には、棚倉町、社川村、高野村、近津山岡組合村を合併し新制「棚倉町」が発足した。

昭和40年代になると上水道の給水が開始され、小中学校の新改築、中央公民館の新設、学校 給食センターの完成などインフラや教育施設の整備が進められていった。さらに、昭和50年 (1975)、中学校跡地を運動場として整備し、町総合体育館が完成する。また、町史編さん事業 が完了し生涯学習に関連するハード面・ソフト面の事業が完了していった。平成2年(1990)には、 複合施設であるルネサンス棚倉がオープンし、平成7年(1995)に町文化センターが開館している。



ルネサンス棚倉



町文化センター

4 棚倉町の食文化

当町は東北への玄関口として古代から多くの人と物を受け入れてきた。当町の名前の由来の一つに、「伊野(古代当地方の名称)に倉を設け穀を蓄え、春、開きわかつ。土民之を伊野の種倉(たねぐら)という」という伝説がある。

この伝説は、当町の地名は穀物の種を納める倉があったことに由来していることを伝えるものであるが、阿武隈川水系の社川と久慈川を利用した稲作が早期に始められ、その恵みによって地域が成りたっていたことが想像できる。稲作が盛んに行われていたことは、民俗芸能の「都々古別神社の御田植」や「お枡明神の枡送り行事」が伝承されていることからも裏付けられよう。そして、古代から現在まで、水稲栽培が行なわれ、近年では東北でも良質の米が収穫できる産地として高い評価を得ている。

江戸時代においても温暖な気候と豊かな水を利用した稲作栽培が中心で、藩の産業として、高 麗人参や梨などの栽培も奨励されたが、定着していない。それは、藩主が頻繁に交代するという 特殊性に由来しているとも考えられる。

昔から集落の冠婚葬祭や年中行事では、女性が中心となって、郷土料理の由来や技術が伝承されて来たが、現在では、生活様式の変化、過疎化、高齢化が進み、その伝承が途絶えつつある。

しかし、一方では、特色ある食文化を地域活性化に繋げようとする動きも見られる。それは、江戸時代の古文書に記載された食膳を復元した取り組みである。安永7年(1778)8月22日夕方の献立であるが、本膳が白米、刺し身、坪(アワビ、マツタケ、すりショウガ)、焼き魚等で、二の膳が汁、天ぷら等。これらの膳の内容から藩の中級以上の武家、または豪商といわれるような商人が食していた膳と推測され、来客用の特別料理とみられているが、復元を担当した食文化研究家の永山久夫さんによれば、「食に対する関心の高さ、財政的な豊かさを感じる」と評している。当時、藩領には平潟港(茨城県北茨城市)があり、海産物も容易に手に入ったようである。

また、江戸時代に武家の「事始め・針供養」に食されていた郷土食に「おこと汁」がある。

(1) おこと汁

江戸時代から「事始め・針供養」の日である2月8日と12月8日の日にはおこと汁が作られており、この材料がたくさん入っているおこと汁は、当町独自のものである。(資料半田家の家例)

≪材料≫

小豆、するめ、干ししいたけ、凍み豆腐、 かんぴょう、こんにゃく、人参、ごぼう、里芋

≪調味料≫

花かつおだし汁、味噌、酒、砂糖



おこと汁

(2) 江戸時代の献上品

江戸時代の棚倉藩から幕府への献上品として、慶応3年(1867)、松平周防守(松平康英)より阿部長吉郎(阿部正静)への申送に「献上物申送 従先規毎年献上ノ時節左ノ通尤仕立方之儀ハ其懸リ之者ヨリ御伝達申候」とある。そして、2月には薯藷(やまのいも)、6月には漬蕨、11月には鮑切漬、また寒中雉子が献上品とされたことがわかる。また、将軍への献上品は「元其国の国産を以て」献上するものであるとされている。

座候 献上: 公辺改革ニ而不及献上旨被仰出候に付當時献上無御 之者ヨリ御伝達申候 従先規毎年献上ノ時節左ノ通尤仕立方之儀ハ其 右之通申送候 品替二相成候処其後先年公辺前同断 被仰出候ニ付当時献上無御座候 御馬前、 伝 略中 六月 略 寒中雉子 是 一品替二相成候処先年公辺御改革二付不及献上旨 月 中伺之上去ル卯年ヨリ丑年秋迄中十ケ年 ハ村々ヨリ代納 達 ハ村ヨリ代納仕来江戸屋敷ニテ取計申候 物 ハ平潟港へ懸リ之者出役ニテ仕立申候猶懸ヨ 申 伺々上去ル卯年ヨリ丑年秋迄中十ケ年ノ間 ·候 送 漬蕨 薯 藷 ノ産馬会ノ条ニ載置ク故ニ茲ニ省ク 鮑も 心得ノ端ニモ可相成哉ト其儘書加置申候 下ケ札平潟港ノ儀ハ川越附二相成候共御 切漬 以上 後二出す 仕来江戸屋敷ニテ取計申候右者 『棚倉町史』 別巻3より 鯣が

(3) 蒟蒻 (コンニャク)

東白川郡の第一の産業は農業であった。農業は川の沿岸に発達し、社川や久慈川の沿岸が中枢となっていた。主な産物の一つに蒟蒻が挙げられる。蒟蒻は木炭・煙草・馬などと共に主な産物として数えられている。しかし、東白川郡地方は自然条件に恵まれていなかったので、多くの人が産業の育成・振興に励んでいた。江戸時代の安政期に棚倉藩主となった松平康圭は、当地の殖産興業に努めた。彼は周防守に任ぜられた後に「歴代の国司 多く、拱手、復封を策り、邑を顧みず、倫安唯息む。康圭、深く民の隠みを恤」いていた。こうした状況に直面して「産を興し、百万、厥策を樹」てた。蒟蒻については「鹿子山腹を墾き、培ひ養ふ。国産の首位を、占む」と述べており、蒟蒻栽培に意を尽くしていたことがうかがえる。



5 棚倉町の代表的な文化財

(1) 流廃寺跡(国指定史跡)

丘陵上に立地する山林寺院跡である。9世紀後半に創建され、10世紀中頃に広範囲に及ぶ火災により廃絶したと考えられている。平成4年(1992)から実施された発掘調査の結果、ほぼ一本の

尾根筋に沿って並列する 13 箇所の人工的な平坦地と 9 棟の礎石建物跡等が極めて良好な状態で検出された。

検出された建物には、伽藍の中心を構成すると考えられる大規模な建物と、小規模な建物があるが、いずれもそれぞれ独立した平坦地や緩斜面に建てられている。そして、これらの平坦地を結ぶ通路や階段が検出されたことにより、伽藍内の導線を復元することができる。



流廃寺跡

(2) 棚倉城跡(国指定史跡)

江戸時代前期に築城された城であり、八溝山を源流とする久慈川が作りだした河岸段丘上の平 坦地に所在する。元和8年(1622)に5万石の大名として棚倉藩主となった丹羽長重が、寛永2年(1625)より築城を開始したもので、常陸国と境を接し、奥羽の玄関口に位置する要衝の地を 押える役割があったと考えられる。長重は寛永4年(1627)白河へ移封となり、代わって棚倉藩主となった内藤信照によって、引き続き城の造営や城下の整備が行われた。その後、城主は徳川 譜代・親藩の家柄が入れ替わり、幕末の戊辰戦争では新政府軍と戦い落城した。城の縄張りは、巨大な土塁と水堀で区画される長方形の本丸と、それを取り巻く二ノ丸、その北西の三ノ丸(林 曲輪)からなる輪郭式の構造である。また、二ノ丸西側崖部には棚倉城で唯一の石垣が築かれている。本丸土塁上には二重隅櫓4棟、一重櫓1棟が建てられ、各櫓間を連結する多門櫓は東北地方の城郭では随一の規模であった。

当町教育委員会が実施した発掘調査により、多門櫓の礎石や、戊辰戦争時と思われる焼土や被熱した土壁材が出土している。江戸時代前期における江戸幕府の奥羽政策と、寛永期の築城形態の有り様を理解する上で貴重な近世城郭遺構である。

棚倉城は8家16代の大名によって守られてきた。その中でも棚倉城を築城した初代城主丹羽長重、城下町を整備した内藤信照、老中職を務め川越市と友好都市になるきっかけである松平康英、最後の城主で戊辰戦争を戦った阿部正静などは棚倉の歴史を考えるうえで重要な人物達である。さらに、戊辰戦争で命を懸けて戦った十六ささげ隊は今も町民の心に強く残る存在である。

① 丹羽長重

丹羽氏は美濃国の戦国大名であり、長重は織田信長、豊臣秀吉に仕えた。関ヶ原の戦いでは豊臣方に属したため領地を取り上げられたが、慶長8年(1603)常陸古渡で1万石の大名に復活し、

同じく江戸崎で2万石、元和8年(1622)には5万石で棚倉藩主となる。寛永元年(1624)幕府の命により、この地にあった近津明神を馬場に移して平城の棚倉城を築き初代城主となった。しかし、棚倉城の完成を見ずして隣国白河への転封となり、棚倉城の完成は内藤家に引き継がれることとなる。



丹羽長重

② 内藤信照

丹羽長重にかわり、寛永 4 年(1627)近江(滋賀県)より 5 万石の棚倉城主となる。内藤家は戦国時代から徳川家に仕えてきた譜代大名であり、内藤家は 3 代にわたり棚倉を統治した。寛永 6 年(1629)、京都大徳寺高僧である玉室宗珀が紫衣事件に関わり棚倉預かりの身となった時、信照は赤館南麓にあった光徳寺に 1 つの建物を建て丁重に和尚の世話をしている。

また、信照は城下町の整備に力を入れた。城下町には商品の問屋や荷物を運ぶ馬の駅が開設され、棚倉藩は東白川郡域における経済の中心地として発展していく。他にも寺社仏閣の保護にも 尽力し、蓮家寺への銅鐘の寄進をしている。

慶安3年(1650)から承応元年(1652)の期間、大阪城代にも就くが寛文5年(1665)江戸にて、 74歳で死去した。

③ 松平康英

外国奉行や神奈川奉行、遣欧使節団の副使を経て、元治元年(1864)に城主となる。慶応元年(1865)には老中職を勤める。慶応2年(1866) 天狗党事件で常陸に兵を出した功績から2万石加増で8万石となり、 天狗党員の処刑も行う。また、同年6月には白河城主になるよう命 令があったが、同年10月中止となり、川越(埼玉県)城主となる。



松平康英

4 阿部正静

4代にわたり棚倉を治めた松平家に代わり、白河から移ってきた阿部正静が慶応2年(1866) 6月19日、10万石で棚倉城主となる。慶応4年(1868)、棚倉藩は戊辰戦争で奥羽越列藩同盟 に参加し白河小峰城を中心に官軍と戦う。

この時、活躍したのが十六ささげ隊である。藩士阿部内膳を総指揮とする 16 人の少数精鋭部隊で夜闇に乗じて敵を襲う戦法を得意とし「仙台鳥に十六ささげなけりゃ官軍高枕」と謡われるほど官軍から恐れられた。部隊の名前の由来には諸説あり、1 つは白河地方で古くから栽培されていた「十六ささげ」という豆からとったと言われている。また彼らが「十六ささげ」の実やさやと同じ色の鎧兜と旗印に弓や槍をかまえ、勇猛果敢に戦い「身を捧げる」ことから名づけられたという説もある。最後まで正静は東北諸藩に援軍を求むべく各地を奔走するが、彼が棚倉を離れていた同年 6 月に棚倉城は落城し、244 年にわたる棚倉藩の歴史は終わりを告げる。

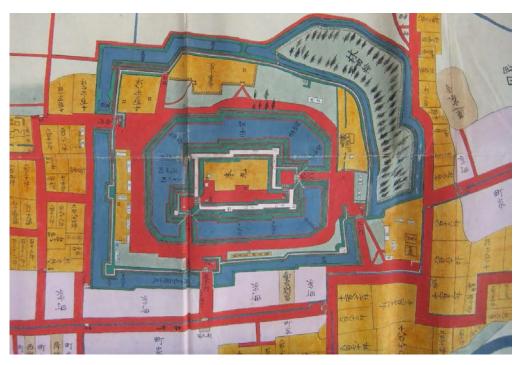
⑤ 稲垣千頴

稲垣千頴は、唱歌「蛍の光」の作詞者として知られる。千頴は棚倉藩を第12代城主松平康爵が治めていた弘化4年(1847)、家臣稲垣半太夫の次男として棚倉に生まれる。松平家が城下に開いた青藍塾で国学等を学び、慶応2年(1866)松平家の川越転封に伴い川越藩校長善館の教師として赴任した。その後も国学者の平田篤胤が開いた気吹舎の塾頭を務めるなど頭角を現し、明治16年(1883)東京師範学校(現筑波大学)の教諭となる。また、『和文読本』、『本朝文範』といった和文や国学の教科書編集にも尽力する。「蛍の光」の原曲は英米で年越



稲垣千頴

しの際に歌われるスコットランド民謡であるが、維新後の西洋音楽教育の導入にあたり、当初から卒業式で歌われるものを目指して歌詞を書き上げた。明治 16 年(1883)に初めて演奏されて以後、日本の卒業式にとって欠かすことのできない唱歌である。



棚倉城絵図

(3) 都々古別神社の御田植(国指定重要無形民俗文化財)

都々古別神社の御田植は、豊作を願って、年の初めに神楽などとともに、稲作の作業過程を、 せりふのやりとりと簡単な所作で、模擬的に演じるものである。

八槻地区は、当町の南部、久慈川沿いにあって、町への入口にあたる。その地区にある八槻都々古別神社の拝殿で、毎年旧暦正月6日に御田植が演じられている。正面奥に御田植の道具をのせた八脚案を据え、向かって左側に楽人と呼ばれる演じ手たちが座り、右手側に宮司や氏子総代などが座り、中央で御田植が演じられる。音楽は太鼓、締太鼓、桶胴太鼓、笛で行われる。まず神楽の松舞、巫女舞、幣舞が舞われ、次に、せき検分、めばらい、田耕い触れ、田耕い、くろばおとし、水取り、代かき、畦ぬり、あしおとめ、お種祈祷、種蒔き、烏追い、田植触れ、田植、

天狐の舞があり、天狐の舞の後に、楽人が全員で「中飯」と言いながら参詣人に細長く切った餅をまいて終わる。

御田植には、松舞の採物や田植の早苗として使う松の枝のほか、平たく丸めた餅を扇形に四つに切って、にわとこの枝をさして鍬に見立てた餅鍬、中飯として配る細長く切った餅などが使われる。これらの餅は前日に搗いて、当日、それぞれの形に切って用意する。代かきに曳き出される牛は、木製台車にのせた木彫の牛で、背中に御幣を立てて紅白の引き紐が付いている。演奏される太鼓とは別の太鼓が用意され、この太鼓の革の面を田に見立てて田植などを行う。お種祈祷では、三方の上に、籾を入れた一升枡を置き、その上に大きな丸餅を三つ重ね、三本の幣束を立てたものが使われる。



天狐の舞



御田植

(4)都々古別神社本殿(国指定重要文化財)

馬場都々古別神社は陸奥一宮として崇敬されてきた古社で、およそ1900年前、日本武尊が東北地方鎮の折に、農業神の味耜高彦根命を地主神として、建鉾山(白河市表郷)に鉾を祀ったことが始まりとされる。大同2年(807)に坂上田村麻呂が現在の棚倉城跡に奉遷して社殿を造り、併せて日本武尊を祀ったとも伝えている。神社が初めて歴史書で確認できるのは、承和7年(840)の『日本後紀』で、延長5



本殿

年(927)には『延喜式』に、陸奥国白川郡名神大社一座「都都古和氣神社」と記載されている。 寛治元年(1087)には、源義家が東北における戦乱を平定した後に鎧や太刀を奉納したとも伝え られ、武神としての性格も併せ持っていたことを窺わせる。

もとは棚倉城の地にあったが、寛永2年(1625)に棚倉藩主の丹羽長重が、幕命により棚倉城

を築城するに際して、現在の地に遷宮した。本殿は、文禄3年(1594)に当時の領主であった佐 竹義宣が豊臣秀吉の命で造営したものと見られる。形式は本格的な三間社流造であるが、組物を 出三斗とし、彫刻を用いないなど、簡素な造りとする。反りのある垂木、庇に架けた水平に近い 梁などが中世的な要素であり、東北地方では数少ない桃山期の本殿建築として、高い価値を有し ている。細部や技法には中世的な要素が残っており、中世から近世への転換期における様式や技 法を知る上で、貴重な存在であるとして国指定重要文化財に指定されている。

(5) 聖護院道興の短冊(県指定重要文化財)

室町時代以降、日本における修験道は本山派と当山派に分かれ対立していた。こうした中で八 機都々古別神社が属した修験道本山派の総本山である京都聖護院の住職を務める道興は、自ら率 いる本山派の組織強化のため、東国の本山派寺院等を巡る旅に出発する。その過程を記した『廻 国雑記』では、白河へやってきた道興が八槻別当を訪ね、歌を詠んだことがわかる。この歌(「梓 弓」)を記したものが八槻都々古別神社に伝わる短冊である。

(6) 八槻文書(県指定重要文化財)

八槻都々古別神社の運営などに関する古文書群「八槻文書」は室町~江戸時代に至る年代の242点が県指定重要文化財となっている。指定文書には天正18年(1590)に豊臣秀吉から八槻別当に宛てられた朱印状や、徳川光圀による八槻別当と贈答のやりとりの礼状といった権力者に関わる古文書も所蔵している。

(7) お枡明神の枡送り行事(県指定無形民俗文化財)

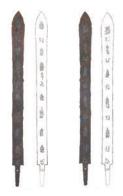
お枡明神の枡送りは、棚倉町福井・玉野・一色・浅川町簑輪の4地区において行われる祭りである。3年ごとに当番の地区を定め、ご神体とされる枡を前回の当番であった地区から遷すもので、ご神体の枡は遷されるつど、地区内の神社に御仮屋とよばれる高床式の建物を設けて納められる。1つの村では数十年に一度の間隔で行事が行われている。農作物の豊作を祈願して行われるもので、古い農耕儀礼の形を残していると言われている。この行事がいつ頃から始まったのかは不明だが、元禄年間(1688~1704)には同様の行事が行われていたことが記録から分かっている。



御仮屋

(8) 流廃寺出土金銀象嵌鉄剣(県指定重要文化財)

調査で発見された刀身に梵字と炎状の文様を交互に配する金銀象嵌 鉄剣は、不動明王像所持の剣か、僧や修験者が所持した剣と考えられ、 明治時代に採集された銅製三鈷杵とともに、流廃寺が密教的な性格を 有していたことを示す遺物として注目される。



金銀象嵌鉄剣

(9) 都々古別神社文書等(県指定重要文化財)

都々古別神社文書等は、中世末期から江戸時代末にわたって書かれた古文書 22 点を指す。元 亀 2 年(1571)に書き改められた神社の由来についての縁起や、文禄 3 年(1594)の佐竹義宣に よる社殿の造営に関する文書、寛永元年(1624)に棚倉城主丹羽長重が自身の領地を神社に寄進 したといった内容の文書がある。

(10) 八槻家住宅(県指定重要文化財)

八槻家住宅は、代々八槻都々古別神社の宮司を務める八槻家の住宅である。周囲に土塁や堀が 残る中世の館の跡が遺り、古くから八槻家がこの場所を拠点としていたことがわかる。建築年代 は旧主屋が18世紀中ごろ、書院棟が19世紀初頭の普請と推定されている。屋敷は北・東境に 堀跡を残すほか、南前方にも土塁や板塀を残し、表門・脇門を開くなど、古式をよく留めている。



書院棟内部



主屋と書院棟

(11) 八槻都々古別神社本殿・随身門(町指定有形文化財)

八槻都々古別神社は、奥州一宮の近津明神として敬われてきた古社である。祭神は農業の神である味耜高彦根命と日本武尊であるが、馬場都々古別神社と同じく、武神としての性格も併せ持っていたとされている。中世に入ると八槻都々古別神社は修験道の拠点となった。八槻都々古別神社の宮司であり、同時に修験道のリーダー的存在でもあった別当大善院は、熊野(和歌山県)参詣の際に信者を引率する先達という役職を務め、その勢力は現在の茨城県大子町やいわき市など広範囲に及んだ。明治時代には郷社とされたため、神社・氏子が抗議し、国幣中社に列せられるように歎願した結果、国幣中



随身門

社となっている。本殿は享保年間(1716~36)に造営されたと考えられ、形式は三間社流造を基調としながらも、奥行きを通常より長くとる独創性も見られ、県内の神社建築のなかでも江戸時代中期を代表する貴重な建造物である。随身門も本殿と同様、享保年中(1716~36)の建築と考えられ、組物の周辺に華やかな彫刻が施されていることが特徴である。

(12) 赤館跡(埋蔵文化財包蔵地)

赤館跡は、大字棚倉字風呂ヶ沢・大字檜木字芋畑沢にある山城である。館が築かれた正確な時期は不明であるが、建武年中(1334~38)に赤館氏が居したと伝わっている。『鎌倉大草紙』によれば応永年間(1394~1428)には白河結城氏庶流の居城であったとされている。永禄3年(1560)には北進政策をとる佐竹氏に対するため白河結城氏による普請が行われ、赤館氏に代わり上遠野盛秀が城代として置かれたが、天正3年(1575)に佐竹氏によって攻略された。以降は佐竹氏による南郷支配の拠点、また陸奥侵攻の前線基地として機能した。佐竹氏が秋田へ移封した後は立花宗茂が城主となり、寛永2年(1625)に丹波長重によって現在地に棚倉城が築かれた。

① 佐竹義宣

当主になり早々、小田原攻めに参加した功により、豊臣秀吉から常陸や下野の正式な支配権を認められた。天正 19年(1591)には本拠であった太田城(茨城県常陸太田市)から水戸城(同水戸市)に移り、常陸における支配をより堅固なものにする。棚倉では、文禄3年(1594)に秀吉の命によって馬場都々古別神社の本殿を建立した。慶長5年(1600)の関ヶ原の戦いにより領地を没収され、2年後に出羽秋田へと転封となった。

② 立花宗茂

豊臣秀吉の九州攻めで手柄をたて、筑後国柳川藩(福岡県)の藩主となった。関ヶ原の戦いでは豊臣方についたことで、徳川家康の処分により領地や地位を失うが、慶長9年(1604)に処分が解かれ、2年後に棚倉藩の藩主となった。宗茂は赤館城主として棚倉を治め、棚倉藩の藩主として、馬場・八槻都々古別神社の朱印状取得に尽力した。元和6年(1620)柳川藩へ20年ぶりに返り咲いた。

6 棚倉の歴史文化的特徴

棚倉町の歴史文化的特徴:古来より交通要衝の地

当町は、陸奥国と常陸国との境界という性格を有し、古来より久慈川沿いに人々が往来する交通の要衝の地であり、当町の歴史文化の根底に影響を与え続けている。

(1) 南下し北上する文化の中継点

当町を流れる久慈川は、その源を八溝山の北斜面に発し、支流を合せて東流し、棚倉の西南より南流して茨城県久慈川より太平洋に注ぐ、延長124kmに及ぶ一級河川である。そして、この流域は久慈川を通じ東北に入る関門にあたり、常陸国(茨城県)を通じて古くからの文化の交流のあったところで、「久慈川文化」などとも呼ばれ、原始より有史にいたる文化が悠久的に南下、北上した中継地点である。

(2) 古代からの信仰と遺された文化遺産

古代祭祀遺跡の建鉾山(白河市表郷)に起源を持つ馬場都々古別神社と八槻都々古別神社は、古来より陸奥一宮または奥州一宮といわれてきた。『続日本後紀』によると、承和8年(841)正月の条に、「奉授坐陸奥国白河郡勲十等都々古和氣神従五位下」とあり、古代白河郡における神についての記述の文献上の初見といわれている。三社の信仰圏は、北は白河市、石川郡から、南は茨城県大子町まで及んでいた。そして今なお地域の総鎮守としての信仰を集め、関連する貴重な文化財や民俗芸能が数多く遺されている。

(3) 東北の玄関口と密教の伝播

古代の陸奥国には、奈良時代に常陸国から菊多関(いわき市)を経由で通じる海道と、白河関(白河市)を経由の山道(東山道)とがあったが、弘仁2年(811)陸奥国海道の10駅が廃止されて、常陸国と陸奥国白河郡を連絡する内陸ルートとして、当町を通過して北上する東山道連絡路が整備された。官道の整備により人々の往来が増え、新たな文化も流入し、9世紀末には密教的性格を有した山林寺院である流廃寺跡が成立する。

流廃寺跡は、東北への密教伝播を知るうえでも重要であり、出土した「金銀象嵌鉄剣(きんぎんぞうがんてっけん)」は現在のところ日本では唯一の鉄剣である。

(4)街道を守る城、大名復活の城

棚倉城下は、茨城県水戸方面から北上する二本の道、棚倉街道(国道 349 号)、南郷街道(国道 118 号)の終着点であり、棚倉城下からは奥州街道(白河方面)、御斎所街道〜浜街道(石川町〜いわき市)、江戸道(栃木県黒羽方面)、平潟街道(茨城県北茨城市)へと街道が分岐する交通の要衝でもあった。

また、関ヶ原の戦いで西軍に与し改易され浪人となっていた立花宗茂が、初代棚倉藩主として大名に復活している。その後、同じく関ヶ原の戦い後に改易され浪人から1万石の大名に復活した丹羽長重が、元和8年(1622)に5万石に加増されて入封し、近世城郭の棚倉城を新規築城する。

(5) 五穀豊穣を祈願する行事・民俗芸能

当町内には、枡を神体として複数の地区が交代でその祭祀を引き継いでいく「お枡廻しの習俗」(国記録選択)や、八槻都々古別神社の拝殿で年の始めなどに稲作過程を模擬的に演じて、豊作を祈願する「都々古別神社の御田植」などの行事や民俗芸能が受け継がれている。これらの芸能は五穀豊穣を願って行われてきた民俗芸能であり、農業と密接に関連している。地区の人々がこれらの行事を共に行うことで、精神的・物理的つながりをより強固にし、助け合いながら農業を営み、生きてきたことを物語っている。

(6) 国学の伝統と近代教育の先駆け

松平周防守氏藩主時代には、「青藍塾」や「長善館」と名付けられた藩校が存在し、斎藤彦 麿らの著名な国学者を輩出した。この国学の伝統は、明治になり稲垣千頴へと受け継がれ、唱 歌「蛍の光」の作詞、古典教科書の原型を作ることになる。また、棚倉藩知事の阿部正功は、 戊辰戦争で疲弊した棚倉藩を復興すべく、明治2年(1869)藩校「修道館」を復興した。明治 4年(1871)に廃校になるが、藩校講堂跡に校舎を建て、修道小学校と称し、明治6年(1873) には棚倉小学校と改称されたのが、現在の棚倉町立棚倉小学校である。また、福島県立修明高 等学校は、統合に際しての校名に修道館から「修」の字を取っている。藩政時代から続く学問 への情熱は今なお連綿と受け継がれているのである。

第3章 文化財の状況

1 指定文化財

棚倉町には、平成31年(2019)3月現在、合計34件の指定文化財があり、国指定が9件、 県指定が16件、町指定が9件となっている。

○指定文化財件数一覧(有形、無形、民俗 記念物数)

平成31年3月現在

文化財の種類		国指定・認定	県指定	町指定	計
	建造物	1	1	2	4
	絵画				0
	彫刻	1		4	5
	工芸品	4	5		9
有形文化財	書跡		2		2
	典籍				0
	古文書		1		1
	考古資料		1		1
	歴史資料		1		1
無形文化財					0
足松文化財	有形民俗文化財		1		1
民俗文化財	無形民俗文化財	1	2	1	4
記念物	史跡	2			1
	名勝				0
	天然記念物		2	2	4
計		9	16	9	34

2 未指定文化財

未指定文化財については、歴史文化基本構想の策定事業を契機として、周辺環境の把握を含めた調査事業に取り組んでおり、今後も、継続的に文化財の調査を実施し、文化財の価値付けと埋もれた文化財の救い出しを進めていく必要がある。

3 棚倉町における文化財把握の取り組みと成果

○文化財調査刊行物及び調査歴

【町史一覧】

刊行物名	内容	発行年度
棚倉町史 第1巻	通史編	昭和 56 年(1981)
棚倉町史 第2巻	古代・中世編	昭和 52 年(1977)
棚倉町史 第3巻	近世・町政編	昭和 51 年(1976)
棚倉町史 第4巻	近世・住民編	昭和 55 年(1980)
棚倉町史 第5巻	近代・現代編	昭和 53 年(1978)
棚倉町史 第6巻	考古・文化財・民俗資料	昭和 54 年(1979)
棚倉町史 別巻一	近世編・資料	昭和 57 年(1982)
棚倉町史 別巻二	近代編・戊辰戦争・明治維新	昭和 57 年(1982)
棚倉町史 別巻三	東白川郡沿革私考	昭和 57 年(1982)

【史料関係】

刊行物名	発行年度
棚倉史談(創刊号)~棚倉史談(10号)	昭和 48 年(1973)~平成 14 年(2002)
棚倉町日向前遺跡 B 地点発掘調査報告書	昭和 48 年(1973)
棚倉城	昭和 49 年(1974)
棚倉の民話と伝説 (その一)	昭和 54 年(1979)
ふるさとの絵図	昭和 55 年(1980)
棚倉町大字沿革誌	昭和 55 年(1980)
田山花袋(録弥)棚倉百勝詠歌集	昭和 56 年(1981)
棚倉の民話と伝説 (その二)	昭和 57 年(1982)
短編小説 (ある訪問)	昭和 57 年(1982)
棚倉の民話と伝説 (その三)	昭和 62 年(1987)
八槻都々古別神社の御田植解説書	昭和 59 年(1984)
森ノ上・久保前・松並平試掘報告書	昭和 56 年(1981)
流廃寺跡	平成8年 (1996)

【報告書一覧】

刊行物名	発行年度
棚倉町胡麻沢古墳発掘調査報告書	昭和 50 年(1975)
松並平遺跡発掘報告書	昭和 60 年(1985)
日向前遺跡B地点	平成6年 (1994)
崖ノ上遺跡	平成9年 (1997)
旧東白川郡役所庁舎建築(解体)調査報告書	平成 17 年(2005)
都々古別三社「御枡廻し」調査報告書 I ~IV	平成 25 年 (2013) ~平成 28 年 (2016)
棚倉城跡Ⅰ~Ⅲ	平成 26 年(2014)~平成 28 年(2016)
流廃寺跡 I ~Ⅷ	平成6年 (1994) ~平成22年 (2010)
流廃寺跡金銀象嵌鉄剣科学調査報告書	平成 15 年(2003)
流廃寺跡	平成 23 年(2011)

流廃寺跡総括報告書	平成 25 年(2013)
町内遺跡試掘調査報告Ⅰ、Ⅱ	平成 16 年(2004)~平成 19 年(2007)
赤館跡-上台地区-	平成 13 年(2004)
八槻都々古別神社八槻家住宅調査報告書	平成 24 年(2012)
八槻都々古別神社・八槻家住宅実測図集	平成 25 年(2013)
八槻家所蔵資料調査報告書	平成 28 年(2016)
井上家資料概要目録	平成 28 年(2016)
馬場都々古別神社建造物調査報告書	平成 25 年(2013)
都々古別三社調査報告	昭和 60 年(1985)
佐川家文書目録	平成 15 年(2003)
棚倉城跡26	平成 29 年(2017)
棚倉町の板碑14	平成 16 年(2004)
赤館跡 赤館公園新設事業に伴う発掘調査5	平成元年(1989)
国指定史跡 流廃寺跡保存活用計画書	平成 29 年(2017)
たなぐらの文化財	昭和 60 年(1985)

【現在までの主な文化財調査】

【現在よくり主は久山州 明旦】 	
内容	調査年
町史編さん事業	昭和 48 年(1973)~昭和 57 年(1982)
棚倉史談	昭和 48 年(1973)~平成 14 年(2002)
棚倉城調査	平成5年 (1993) ~
流廃寺跡調査	昭和 49 年(1974)~
都々古別三社調査報告	昭和 59 年(1984)
馬場都々古別神社の調査研究	平成 24 年 (2012) ~平成 25 年 (2013)
八槻都々古別神社・八槻家住宅調査報告	平成 23 年(2011)~平成 24 年(2012)
	平成 24 年 (2012) 1 月~3 月
御枡廻し調査	平成 25 年(2013)~
旧東白川郡役所庁舎建築(解体)調査	平成 15 年(2003)10 月~12 月
赤館跡-上台地区-調査	平成 11 年(1999)~平成 12 年(2000)
赤館跡調査	平成 17 年(2005)
赤館跡調査	昭和63年(1988)8月~9月
森ノ上遺跡、久保前遺跡、松並平遺跡調査	昭和 55 年(1980)11 月~12 月
花園館跡調査	平成 16 年(2004)
松並平遺跡調査	昭和 58 年(1983)、平成 18 年(2006)
段河内 A 遺跡調査	平成 18 年(2006)10 月~11 月
胡麻沢古墳発掘調査	昭和 47 年(1972)10 月~11 月
日向前遺跡 B 地点	平成4年 (1992) ~平成5年 (1993)
佐川家文書調査	昭和 55 年(1980)
崖ノ上遺跡調査	平成5年(1993)7月~8月
	平成6年(1994)1月~平成7年11月(1995)
	平成8年5月 (1996)
熊ノ坂遺跡試掘調査	平成 26 年(2014)

一色薬師堂・福井御桝明神・長久寺・如意輪寺調	平成 17 年(2005)
	, , ,
査	
町内文化財調査(観音寺・芳松寺)	平成 19 年(2007)
	T. D. 10 F. (0000)
町内文化財調査(常降寺・創徳寺・旭観音堂)	平成 18 年(2006)
町内文化財調査(山本不動尊・堀川観音堂)	平成 19 年(2007)
門門又但兒朔里(田本不對导:堀川既自至)	十)从 19 平(2007)
町内文化財調査(西迎院 八槻都々古別神社)	平成 19 年(2007)
四个人们的明显(四处的 人物和人口为开工)	十)及19 十 (2001)
棚倉町祭礼調査	昭和 53 年(1978)
加尼門尔化则且	四年 55 十 (1370)
石造物調査	平成 28 年 (2016) ~平成 29 年 (2017)
71.21/1/1/1/11.	一次 20 千 (2010) - 一次 25 千 (2011)

4 文化財の把握・保存・活用の課題

当町では、数多く遺る歴史・文化を守り、活かし、繋げるため、町史の編さん、各文化財の調査、展示やイベントなどを行ってきた(資料参照)。しかしながら、未だ多くの保存活用における課題が存在しているのが現状である。今後、「歴史文化遺産を守り、活かし、繋げる」を推進していくためには、課題を着実に解決していかねばならない。そのため課題を整理し「文化財の把握・保存・活用の課題」として把握することが必要である。

(1) 指定文化財の再調査・研究

指定文化財の調査・研究を進めているが、未だ行き届いていない指定文化財も存在する。最 新の研究成果を指定文化財に還元し、新たな価値の創出をするには至っていないのが現状であ る。

(2) 未指定文化財の把握・調査

未指定文化財の把握調査や、学術調査等は進めている状況ではあるが、全体を把握するには 至っていない。また、当町には各地区に数多くの文化財が存在しているが、指定文化財や年代 の古い文化財との比較等で、意識的にその他の文化財の価値が正しく評価されていないものも あり、実際に保存管理の行き届いていない個人所有の文書、建築物や、地区で行われていた冠 婚葬祭等のしきたり等、人知れず散逸・消失してしまっているものも存在していると考えられ る。

このような法制度等により担保されていない文化財が、滅失の危機に瀕している状況である ことは言うまでもない。町民の身近にある有形・無形の未指定文化財を散逸・消失させないた め、調査を実施することが求められている。

(3) 文化財の持つ総合的な価値の保存・活用

当町では、それぞれの文化財を単体で保存・活用してきており、それぞれの文化財同士の関係や周辺環境まで考えられた総合的な価値の保存活用が十分になされていなかった。

(4) 文化財の維持管理と修理

個人所有の有形文化財は経年劣化や、代替わり等による保存環境の変化による棄損や滅失が 危惧される。また、価値付けが未だなされていない未指定文化財や文化財を取り巻く周辺環境 の現状は、維持さえ難しくなってきているものも存在する。さらに、これらの修理を行うとし ても財政的な状況や、技術者の確保等の課題がある。

(5) 周辺環境の維持・向上

文化財の保存活用を図る上でそれらを取り巻く周辺環境は、それぞれを別のものとして捉えるのではなく、文化財と一体的に措置を講じなくてはならない。それにより総合的に文化財の魅力やストーリーを捉えることが重要になる。現状、景観を阻害している工作物や電線、後継者不足による荒れた農地・山林、空き家などに対策を講じる必要がある。



田園風景の中の雷線

(6) 防災・防犯に対する考え方

近年、東日本大震災や西日本豪雨など、大規模自然災害による被害が各地で発生している。 当町でも東日本大震災に罹災した際は、多くの文化財に被害がもたらされた。さらには今後、 火災や水害などにより文化財が棄損や滅失に追い込まれることも想定される。また、文化財を 狙った盗難や毀損行為などの人的・物的被害も近年全国各地において増加傾向にあるのが現状 である。これらを念頭に置いた対策も求められている。

(7) 担い手不足

当町の総人口は昭和30年(1955)の町村合併時の19,443人をピークに減少傾向にあり、平成30年(2019)時点で14,130人となっている。

過疎と少子高齢化や都市部への人口流失による人口減少、若い世代が地元に残る歴史文化に対して触れる機会が減っていることにより、今まで保たれてきた歴史文化の継承が危機に陥っている。中心部(棚倉地区)では継承者不足による小売業等の廃業や、承継所有者の代替わりによる不在地主の増加により、地域文化や伝統的風習の喪失、歴史的建造物の滅失などが進み、地縁組織を中心に取り組んできた文化財の継承が立ち行かないことが大きな課題となっている。農村部(社川、近津、高野、山岡地区)では農業者の高齢化と新しい世代の引継ぎ不足により、里山や田園風景の荒廃が目立つようになってきている。

特に、中心部、農村部の両方に言えることは、各祭りや行事などでは高年齢化と若者離れが進み、全体的に縮小傾向にあり、休止、廃絶に追い込まれたものも少なくない。

将来、歴史文化が滅失することによって当町のアイデンティティや魅力、地元愛までも滅失 していく恐れが発生する。それらの課題を解決するには、地域の歴史と文化の魅力や価値を若 者世代や新住民に伝えていき、担い手の育成につなげていくことが求められている。

(8) 主体間の連携、取り組みの効果

一部の有志や、行政、各地区や各祭りの活動団体等により、歴史文化を活かした活動を行っているが、それぞれの効果が限定的になっているものも少なくない。これらの活動の効果をより一層広げていくためには、活動団体や、学識者や大学、周りの市町村などの保存活用に関わる団体間の連携を作り、相互に活かしあえる立場を超えたかたちを創造することが求められる。それによって地域住民や町外の人たちが参加しやすい環境を作ることが重要である。

第4章 文化財の把握・保存・活用の方針

第3章で明らかにした当町の歴史文化の特徴と前項で整理した文化財の把握・保存・活用の 方針の課題を踏まえて、歴史文化を活かしたまちづくりに資するため、次のとおり文化財の保存 活用方針を掲げる。

基本方針

1 文化財を"発見する"

当町には、馬場都々古別神社、八槻都々古別神社、棚倉城跡、赤館跡、都々古別神社の御田植などの多くの指定文化財・未指定文化財が存在している。しかし、これらは人口減少や保存団体の解散などにより散逸・消失などの危機的状況に瀕している。文化財を後世へ継承していくため、より一層、学識者や地域住民と共に協力し、調査・研究を行うことで、文化財の正しい認識や理解の醸成・新たな文化財の活用につなげていく。また、調査・研究の成果をさらに活用できるよう、記録写真等によるデータベースの構築を検討し、さらなる文化財の活用を図る。

(1) 指定文化財のさらなる調査

科学技術等の発展により調査技術が向上していることから再調査を行うことで、新たな価値 の発見や所有者及び町民への文化財に対する意識向上を図る。

(2) 未指定文化財の把握と調査の実施

未指定文化財の把握に努め、また未指定文化財を計画的かつ緊急度の高いものから、学術調査をすすめる。

(3)総合的な文化財の活用

地域住民と協力しながら文化財の把握に努め、関連文化財群を核とした観光などへの活用及び、学校教育等への活用を推進する。

(4) データベースの構築

調査・研究の成果をさらに活用できるよう、記録写真等によるデータベースの構築をすすめる。

2 文化財を"守る"

後世に文化財を継承していくためには、文化財の維持管理や支援制度の構築が求められる。そのため、専門機関や専門家の助言や学術機関との連携により、文化財の保全に関わる制度・体制の構築を図っていく。また、近年は全国各地で災害が頻発しており、文化財が常に災害等で破損・滅失する危険性が考えられる。地域住民と共に文化財の防災・防犯・周辺環境の維持に努め、保全に取り組んでいく。

(1)維持管理・修理

文化財の保存・管理・修理に対する支援の充実を図る。また、文化財所有者や保存団体を含めた地域住民へ適切な維持管理の方法の周知に努める。

(2) 周辺環境の維持・向上

文化財周辺の自然環境の維持・保全に努める。また、田園風景などの景観を維持するため、 阻害要素の改善や除去などの対策の検討をすすめる。

(3) 防災・防犯に関わること

有形文化財は、火災や地震、風水害などにより破損・滅失の可能性があるので、文化財の速 やかな保全が行えるよう地域住民と協力した文化財の防災・防犯対策について検討をすすめる。

3 文化財を "伝えていく"

文化財を守り伝えていくためには、それを担っていく人材の育成が不可欠である。

当町では、減りゆく担い手不足の対策として、学校教育機関と連携し、子供たちや若い世代の人々に地域の伝統行事への参加や、地元の歴史を教える教室など、歴史文化へ触れる機会を増やし、郷土愛の醸成を喚起していく。

また、歴史・文化を継承していく志のある人材を集め、多くの町民が当町の歴史の語りべとなり、人から人へ歴史・文化を伝承するシステムの構築を図る。

(1)無形文化財等の担い手の育成と支援

学校教育での体験学習や若者や町外の人々が、継承していくことができる環境・体制の整備 を図る。

(2) 学校教育・生涯学習との連携

文化財を活用した学校教育・生涯学習との連携を図る。

4 文化財を"知る・楽しむ"

文化財は当町の歴史を語るうえで貴重なものであり、継承していかなければならない。地域住 民や保存団体、関係諸団体と共同で取り組みながら、さらに文化財の価値の普及啓発、及び観光 資源として位置づける。

(1)情報発信の充実

町広報誌のほか、文化財に関するリーフレット、当町の公式ホームページや SNS での文化 財の発信に努める。

(2) 文化財を活用した観光促進と環境整備

行政機関や地域住民との連携を強化し、観光ルートの整備や資源周辺の環境整備をすすめる。

(3) 他市町村との連携

情報の共有や意見交換などの交流をとおして、広域的な視点からの活動・展開と新しい形の 活動の充実・発展を促す。

(4) 生涯学習においての普及啓発と活用

町内外の人々の文化財に対する知見・意識の向上につなげるため、文化財の公開や講演会等の開催に際しては、図書館などの生涯教育関係施設との連携を通して、町内外の人々が文化財を学び楽しむ機会の充実を図る。

(5) 大学諸機関、芸術団体との連携

調査やイベント等において、近隣大学や芸術団体と連携し積極的に参加を呼び掛けることに よって、当町との関係性を深め芸術鑑賞や伝統文化を体感する機会の充実、若者の移住・観光 促進を図る。

第5章 関連文化財群

1 関連文化財群の考え方

(1) 関連文化財群とは

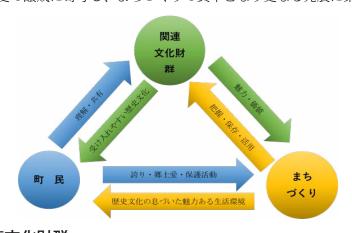
関連文化財群とは、「有形・無形、指定・未指定にかかわらず様々な文化財を歴史的・地域 的関連性に基づき一定のまとまりとして捉えたもの」である。

この定義を踏まえ当町では、歴史文化を活かしたまちづくりを進めるため、「関連文化財群」を設定し、それぞれのストーリーのもとで、関連性のある文化財を一体として捉え、魅力と価値をわかりやすく表現し、町に歴史や文化を語るための重要な要素として総合的に保存・活用していく。

(2) 関連文化財群ごとのストーリー

当町の文化財の核となる「指定文化財」や町民に大切にされてきた歴史文化を中心に「棚倉町の歴史文化」が特色づけられたストーリーを設定していく。ストーリーでまとめることで、それぞれの特色の中で活きる、未だ価値の計られていない文化財や地域で大切にされている文化財などを、包括的に保存していくことができる。それによって、現在高い価値が明らかになっているものは言うまでもなく、これから新たに見いだされるものの魅力や価値を含めた効果的な活用につながると考えられる。

以上を踏まえ、当町では7つのテーマをもとにストーリー展開した関連文化財群を設定した。 これにより、共通のテーマを持つ文化財を多くの町民が理解・共有しやすく、町の歴史文化に 対する誇りや郷土愛の醸成に寄与し、まちづくりの資本となり更なる発展に繋げていく。



2 棚倉町の関連文化財群

- (1)2つの都々古別神社と豊作祈願
- (2) 陸奥国と常陸国の境界
- (3) 兵たちのせめぎ合い―城郭の博物館―
- (4) 江戸時代の絵図を持って歩ける城下町
- (5) 東白川郡の中心地―棚倉の近代化と文化
- (6) 伝承や物語
- (7)時の鐘回廊

3 関連文化財群の概要

(1) 2つの都々古別神社と豊作祈願

■ストーリー

平安時代の書物である『続日本後紀』や『延喜式』には、この頃に都々古別神社が成立した と述べられている。中世になると馬場都々古別神社と八槻都々古別神社は、東北地方における 修験道の一大拠点となり勢力を強めた。両神社は多くの文化財を現在に伝えており、総合的に 保存活用する必要がある。

馬場都々古別神社は都々古別三社または近津三社のうちの上之宮で、もともとは棚倉城の本丸の位置に鎮座していた。寛永2年(1625)、棚倉藩主丹羽長重が棚倉城を築城するに際して、神社を現在地に移した。祭神は農業の神である味耜高彦根命と日本武尊であるが、寛治元年(1087)に源義家が東北における戦乱を平定した後に鎧や太刀を奉納したことから、武神としての性格もあったとされている。東北の神社の中でも最高位の格式をもつ陸奥一宮として古くから信仰を集め、明治時代には全国で約50ヵ所しかない国幣中社に列せられるなど、歴史を通じて格式高い神社であり続けた。そして馬場都々古別神社とかかわりが深い祭礼であるお枡明神のお枡送りが毎年11月23日・24日に行われる。お枡廻しの習俗は現在の大字にあたる近世の村のいくつかが一組になり、枡そのものや籾を入れた枡を神体として村から村へ順にまわしながら祀っていくもので、1つの村では数十年に一度の間隔で行事が行われている。

八槻都々古別神社は都々古別三社または近津三社のうちの中之宮となっている。祭神は農業 の神である味耜高彦根命と日本武尊であるが、馬場都々古別神社と同じく、中世には武神とし ての性格もあったとされている。中世に入ると八槻都々古別神社は修験道の拠点となった。八 槻都々古別神社の宮司であり、同時に修験道のリーダー的存在でもあった別当大善院は、熊野 参詣の際に信者を引率する先達という役職を務め、その勢力は依上保やいわきなど広範囲に及 んだ。明治時代には郷社とされたため、神社・氏子が抗議し、国幣中社に列せられるように歎 願した結果、国幣中社となった。八槻都々古別神社の宮司と大善院の別当職を務めてきた八槻 家の住宅は、周囲に土塁や堀が残る中世の館の跡が残り、古くから八槻家がこの場所を拠点と していたことがわかる。八槻家住宅は表門や主屋、書院棟や土蔵などによって構成されており、 敷地の中央にある日常生活の場である主屋と客人を迎えるための書院棟は、それぞれ江戸時代 中期に建てられた貴重な建物となっている。また八槻文書には中世における東北の熊野信仰を 知る上で貴重な資料が多い。祭礼では御田植が毎年旧正月6日に行われている。御田植はそ の年の豊作を祈る芸能であり、稲作の作業過程を模擬的に掛け合いによって演じられる。その 動きは能や狂言の所作に通じるものがあり、鎌倉時代には成立していたと考えられている。ま た、旧暦11月1日に行われる霜月大祭では「七座の神楽」と「太々神楽」が拝殿で演じられ、 七座のすべてを演じるのは60年ごとの神輿巡幸の時とされている。

関連文化財の構成要素

馬場都々古別神社 八槻都々古別神社 八槻都々古別神社の御田植 八槻都々古別神社の神楽 お枡明神の枡送り行事



(2) 陸奥国と常陸国の境界

■ストーリー

町内には古くから久慈川沿いに人々が生活を築いており、弥生時代の遺跡から出土した「棚 倉式土器」は、東北地方南部の弥生時代中期前半の標式資料になっている。

古代には陸奥国府(現在の宮城県多賀城市)と常陸国府(現在の茨城県石岡市)を結ぶための官道が、当町を中心とした現在の東白川郡地域の久慈川沿いに新設され、当町には「長有」の駅家が設置された。官道と駅家の設置により、これまでの集落の構造が大きく変化し、陸奥国と常陸国の交通の要衝としての機能が強化されている。

久慈川の支流である宮川沿岸に位置する高渡遺跡(八槻字高渡)は縄文時代中期~後期にかけての集落跡であり、縄文土器や石器、特に土偶などが多数確認されている。また崖ノ上遺跡(棚倉字崖ノ上)では、主に縄文時代後期~晩期の土器や石器などが出土しており、明治21年(1888)元棚倉藩知事の阿部正功による調査では弥生時代中期の壺形土器数点が出土している。これらはのちに「棚倉式土器」と命名され、東北における弥生時代土器研究において重要な資料となっている。松並平遺跡は古墳時代から平安時代の集落跡であり、古来より住みやすい土地として認識されていたことが分かる。また当遺跡では、平安時代に規模が拡大することや当時の役人層が身に着けていたとされる帯金具が出土していることなど、近隣を通過したと考えられる駅路と何らかの関係があるといわれる。流廃寺跡は平安時代に建立された寺院跡であり、当町での継続的な発掘調査の結果、多数の礎石建物跡のほか、数々の遺物が確認された。特に金銀象嵌鉄剣の発見は全国でも例のないものである。流廃寺跡の建物遺構は残存状況が非常に良く、平安時代における仏教を考える上で全国的に貴重な遺跡であり、東北地方における仏教の広まりを知るうえで重要な遺跡である。

9世紀の当町を考えるうえで欠かせないのが、八溝山における産金である。陸奥国白河郡、下野国那須郡、常陸国久慈郡にまたがる八溝山は古代における産金地であり、現在でも砂金を採取することができる。承和3年(836)には八溝山から採れた金を朝廷に貢納して遣唐使の費用を助けたとして、八溝山にある八溝峯神社が賞されたとする記事が『続日本記』に載せられている。

関連文化財の構成要素

高渡遺跡 崖ノ上遺跡 松並平遺跡 八溝山 流廃寺跡 堤古墳群 塚原古墳群 胡麻 沢古墳群



塚原古墳群



松並平遺跡出土品



(3) 兵たちのせめぎ合い―城郭の博物館―

■ストーリー

中世における棚倉町域並びに東白川郡域は群雄割拠な地域であり、北に伊達氏・石川氏・浅川 氏・田村氏、東に岩城氏、南に佐竹氏、西に白河結城氏、蘆名氏などの戦国大名が隣接していた。 特に天正年間は、佐竹氏と伊達氏の攻防が繰り広げられた場所であり、赤館や寺山館はその舞台 となった。

町内には「中世城館」の持つ、多様な構成要素の大半が、一つの地域内に揃っているという価値があり地域全体が「城郭史の総合博物館」と見ることもできる。

以下に特徴的な城郭の概要を記す。

① 赤館跡

主郭の平均標高は340m、城下からの比高は70mであり、眼下に棚倉の街並みが一望でき、南に塙町・矢祭町の山並みを見渡せる要地である。

館が築かれた正確な時期は不明だが、建武年中(1334~38)に赤館氏が居したと伝わる。「鎌倉大草紙」によれば応永年間(1394~1428)には白河結城氏庶流の居城であったという。永禄3年(1560)、北進政策をとる佐竹氏に対するため白河結城氏による普請が行われ、赤館氏に代わり上遠野盛秀が城代として置かれる。天正3年(1575)に佐竹氏により攻略され、それ以降は佐竹氏による南郷支配の拠点として、また陸奥侵攻の前線基地として機能した。慶長7年(1602)に佐竹氏が秋田へと移封した後、立花宗茂が城主となるなど、寛永2年(1625)に棚倉城が築かれるまで、地域支配の拠点となっていた。現、主郭を始めとする多くの曲輪・空堀・土塁・土橋・堀底道などの遺構を良好に遺す。

② 寺山館跡

館跡の西側下には、南北に久慈川が流れ、天然の要害を形成している。標高 335m、比高 70m の蛇頭山の尾根上に位置し、別名を蛇頭館とも呼称される。

築城年代は不明だが、白河晴綱の時代(16世紀)に深谷治行が城代であったという(「白河関物譚」)。16世紀中期に北進を続ける佐竹氏が、東館(福島県矢祭町)・羽黒館(同塙町)を攻略した後、永禄4年(1561)に寺山館を落城させた。それ以降、天正3年(1575)に赤館を攻略するまで、佐竹氏の前線基地の役割を果たす。元亀3年(1572)には奪回を図る白河氏・蘆名氏・田村氏の連合軍によって攻められたが撃退している。天正18年(1590)に豊臣秀吉の命により破却された。

③ 中丸館跡

赤館の北東 2km 地点に所在する。

築かれた年代は不明だが、「白河古事考」によれば、文亀年間(1501 ~ 04)頃に仲丸左京太夫が 居城したという。同史料内別項では、白河結城氏家臣の上遠野盛秀の居城であったとも伝わる。

館内には、北側の「一番平」、南側の「二番平」と呼ばれる2つの曲輪があり、それを囲むよう

に長大な空堀・土塁をめぐらせている。土塁の一部は幅広で、櫓台の役割を果たしたと考えられる。

④ 八槻館跡

県指定建造物に指定されている八槻家住宅の裏山である。館の歴史は不明ながら、その位置関係から、中世後期に八槻都々古別神社宮司・大善院別当を務めた八槻氏の居城(詰の城)と考えられる。

山の尾根を利用して曲輪が配され、土塁・空堀で囲まれている。また東側の斜面には竪堀が走る。なお、現八槻家住宅は敷地内を土塁・堀で囲まれており、中世には八槻館の一部(根小屋ないし居館部分)であったと考えられる。

関連文化財の構成要素

赤館跡 寺山館跡 中丸館跡 古矢鎌館跡 花園館跡 鹿子山館跡 千石館跡 三上館跡 金井館跡 八槻館跡



(4) 江戸時代の絵図を持って歩ける城下町

■ストーリー

戦国時代から近世への転換期における当町は、「復活の地」と捉えることができる。関ヶ原の戦いで西軍についたことで改易された立花宗茂は、この地で大名として復活している。さらに、丹羽長重は棚倉城を築城し、内藤信照が城下町を整備した。

棚倉城を中心として東西南北に街道が整備されたが、現在に至るまで街道が、棚倉の交通・ 流通を支える大動脈として機能している。棚倉城の城下町は、東西南北に通じる街道の分岐点 になっており、水戸街道を経て陸奥国に入る交通の要衝であったことが窺える。

現在、町の中心部を貫く県道には、南北に3つの矩折れを持っており、城下町の記憶を留める遺構となっている。メインストリートから1歩東西に入ると400年前の路地が現在でも残っているが、これは戦災にあっていないこと、近代の都市建設において大規模な地形改変を行わなかったことが影響している。街路の区画内も厚い盛土がなされておらず、道を歩く目線で往時の町割りを感じることができる。街路には「食い違い」や「矩折れ」、「行き止まり」があるほか、路地の奥が段丘崖になっていて先が見えなかったり、時には沖積地を遠望できたりする。また、そこでは水郡線の汽車や、集落・水田を見ることができ、町の交通環境や多様な土地利用、生業の一端が窺える。

① 街道によるつながり

1) 水戸街道

水戸街道は、奥州街道の矢吹宿(矢吹町)から水戸までをつなぐ街道である。江戸から水戸、 奥羽をつなぐ脇街道として機能しており、奥羽の大名らがこの街道を江戸と領地の往来時に

使用している。当町域においては堤一上台一棚倉一流 一八槻という地域を通過している。街道沿いには一里 塚(逆川・八槻)が現在も遺り、町の中心部には「鍵の 手」「食い違い」「矩折れ」「行き止まり」が現在も道 路のなかに存在している。また明治 40 年(1907)頃、 一里塚の目印として植えられ、その後児童の健全な育 成を願い、社川小学校内に移植された希望の桜(町指 定天然記念物)が存在している。



2) 平潟街道

水戸街道から分岐する平潟街道は、八槻から分かれ

棚倉藩の飛び地である平潟(茨城県北茨城市)に続く街道であり、棚倉藩は平潟には津奉行所と役人を置き、平潟港の管理を行っていた。平潟街道は、白河地方における浜通りと中通りを結ぶ唯一の街道として機能していた。そのため、東廻り航路の中継地であった平潟からは魚介類・鰹節・塩・鉄などを、当町からは薪炭・木材、棚倉藩の廻米が運ばれるなど経済活動が活発な街道であった。特に塩・鉄が運ばれたため、塩の道とも呼ばれる。

② 藩政期から続く祭

宇迦神社は、伝説によれば、白河国造の塩伊乃己 自直命が、この地を拓くに当たり、穀物の神である 倉稲魂命を祀ったことが始まりとある。以来、城下 の総鎮守として親しまれている。社殿の創建は神亀 年間(724~729)、飯野村(上台区、玉野区、福井区) に宇迦明神を祀ったものが最初と伝えられ、後に初 代藩主の立花宗茂が慶長年間(1596~1615)に現



在の地に遷宮した。元禄14年(1701)時の藩主内藤弌信が現在の社殿を再建している。

毎年、10月には五穀豊穣を願い、秋の例大祭が開催されている。伝承では文化・文政時代 に始められたとされており、現在では大屋台(山車)や神輿が繰り出し、囃子太鼓などの興行が 随所で行われる。また、新町組・い組が祭りの保存継承に取り組んでいる。

関連文化財群の構成要素

街道によるつながり

水戸街道…八槻一里塚、逆川一里塚、希望の桜、鍵の手、町割り、八槻宿、堤宿 伊王野道…山際一里塚、天狗党の墓、戸中宿

平潟街道…平潟港(北茨城市)へと続く街道。棚倉に海からの塩や鉄を運ぶ街道。

街道の基点…棚倉城跡

藩政期から続く祭り…宇迦神社例大祭



(5) 東白川郡の中心地―棚倉の近代化と文化

■ストーリー

近世に形作られた城下町棚倉の都市構造や中世・近世以来の歴史文化は、現在においても受け継がれているが、一方でこれらを基盤としながらも、まちの近代化も行われてきた。

白棚線・水郡線の敷設は本町の近代化を考えるうえで重要である。白棚線は私鉄「白棚鉄道」が大正5年(1916)に旅客営業を開始したが、第2次世界大戦の戦況悪化に伴い廃線となった。その後、昭和32年(1957)に線路跡地を活用し、「白棚高速線」として国鉄バス路線の営業を開始すると、国鉄民営化によりJRバス白棚線となり、現在に至る。また、水郡線はJR郡山駅と茨城県にあるJR水戸駅を結ぶ鉄道路線であり、昭和7年(1932)11月に磐城棚倉駅が開業すると、2年後には国鉄水郡線が全線開通し現在に至る。

教育・文化に関しては、明治2年(1869)に棚倉藩知事であった阿部正功が藩校修道館を復活し、近代以降の本町における教育活動が開始されると、明治33年(1900)に東北白毫学院が開校する。同校は東北地方で3校目に設立された私立中学校であった。また、本町出身の画家である勝田蕉琴は文展・帝展の常連であるだけでなく、後進育成にも貢献した人物である。彼の画業は、現在宇迦神社や山本不動尊などに遺されている。明治・大正期の自然主義文学者である田山花袋は、義兄の勧めにより棚倉を訪れ縁談をしている。その道中で辿った棚倉などの名勝・旧蹟を和歌に詠み、東白川郡の自然美・歴史の趣ある情景を残した短歌集「棚倉百勝詠歌」や小説「ある訪問」などがあり、歌碑が長久寺、蔵光寺に遺されている。

① 鉄道の施設

1) 白棚線

白棚線はJR白河駅とJR磐城棚倉駅を結ぶJRバスの路線である。第2次世界大戦中に鉄道輸送が休止されるまでは国鉄による鉄道輸送が行われていた。

白棚線建設の経緯・目的としては、日本鉄道株式会社が東京―青森間の幹線(現在の東北本線)を建設したことにより、白河への依存関係が強まったこと、沿線の炭鉱から貨物輸送が必要であったことの2点が挙げられる。

国鉄白棚線の前身である私鉄「白棚鉄道」が、大正5年(1916) に軽便鉄道方式で旅客営業を開始したのが白棚線の始まりである。同線では蒸気機関車国鉄1225系により運行が開始され、昭和4年(1929)にはガソリン自動客車が導入されると「モダン」として親しまれた。しかし、第1次世界大戦後の不況や、国鉄水郡線の開業などの影響で、輸送量が減少し、昭和11年(1936)に政府借上、国鉄白棚線となる。そして昭和19年(1944)に太平洋戦争の戦況悪化に伴う軍への金属供出でレールが撤去され、鉄道輸送の廃止を余儀なくされた。その後、昭和32年(1957)に線路跡地を舗装し、国鉄白棚線は「白棚高速線」として国鉄バス路線



メガネ橋

の営業を再開した。昭和 44 年(1969) 東名高速バスが開業するまで、唯一の「高速」バス路線である。バス専用道の整備や地方の鉄道路線のバス路線への転換などは、当時全国的にも珍しいケースとされ、後の地方鉄道のバス移管や BRT のモデルとなった。さらにこの専用道では、道路・鉄道両用バスや高速バスなどの試験走行も行われた。昭和 62 年(1987)の国鉄民営化により JR バス白棚線となり、現在に至っている。

なお、白棚線に関わる近代化遺産は、メガネ橋が大字小菅生に存在している。メガネ橋は 大正5年(1916)のレンガ造りの鉄道橋であり、現在も当時の面影が窺うことができる。

2) 水郡線

水郡線は、福島県にあるJR郡山駅と茨城県にあるJR水戸駅を結ぶ鉄道路線であり、現 在奥久慈清流ラインという愛称がつけられている。当路線は、新潟や会津若松、郡山と水戸 の運輸交通の利便化を図り敷設された。

昭和7年(1932) 11月に水戸方面から延伸されてきた国鉄水郡南線が棚倉の街に到達し、水郡南線磐城棚倉駅が開業する。同線では蒸気機関車(以下 SL)による運行が行われるが、昭和27年(1952)に水戸~常陸大子間でディーゼル列車による運行が始まり、高度経済成長期頃からの動力近代化に伴い、昭和45年(1970)に同線のSLによる運行が全廃された。国鉄民営化後の平成4年(1992)にワンマン運転が開始され、現在の運行形態に至っている。

なお水郡線に関わる近代化遺産は、磐城棚倉駅待合室などがある。磐城棚倉駅跨線橋は同年建造の鉄骨製である。また建築物としては磐城棚倉駅倉庫が、昭和15年(1940)建築の木造、磐城棚倉駅待合室が昭和9年建築の木造であり、水郡線創業時の趣を今に伝えている。

② 教育・文化

1)教育

棚倉における近代以降の教育の始まりは、明治 2 年(1869)に開校した修道館からといえる。 修道館は、棚倉藩知事であった阿部正功(1860 \sim 1925)が復活させた棚倉藩の藩校であり、 分校は 5 か所存在していたとされる。この修道館は、後に修道小学校を経て明治 6 年(1873) に棚倉小学校へと改称した。棚倉小学校のように明治期には小学校が 14 校開校されている。

明治 20 年代より本町では、旧制私立中学の設立運動が盛り上がりを見せている。明治 20 年(1887)に開校した己丑学舎は、開校して間もなく廃校となったが、明治 33 年(1900)には新たに東北白毫学院が長久寺住職であった園部日敬らを中心に開校した。同学院は、東北地方で東奥義塾、東北学院に次ぐ3番目に設立された私立中学校であり、名誉賛成委員には旧藩主の一族である太田資重や東洋大学の創設者である井上円了、衆議院議長を務めた河野広中らが名を連ねていることからも、地方における中等教育普及への期待が窺うことができる。しかし、資金難の影響から8年後である、明治 41年(1908)に学院が廃校すると、その校舎を利用し東白川郡立農蚕学校が同年3月に開校した。農蚕学校は、福島県ならびに東白川郡における養蚕製糸業の発展による、技術的基礎を教える学校の設立の要請から開校した。農蚕学校は現在の福島県立修明高校に系譜として受け継がれている。

また戦争終結直後である、昭和 20 年(1945) 10 月、東京の神田三崎町教会の人々と棚倉町民により養護施設「愛生園」が創設された。現在の「堀川愛生園」である。愛生園は第 2次世界大戦による戦災孤児の救済を目的として創設され現在に至る。

2) 勝田蕉琴

勝田蕉琴は、棚倉町出身の画家であり、文展・ 帝展に精力的に作品を出品するだけでなく県展の 創設など福島県内の後進育成に力を注いだ人物で ある。現在においても彼の足跡は町内に遺されて おり、宇迦神社には素戔嗚尊による八岐大蛇退治 を題材とした絵馬が存在している。また棚倉小学 校には、親鶏と雛鶏を描いた作品が残されており、



戦時中に福島県本宮町に疎開していた時期の作品である。山本不動尊の鐘楼には、昭和 28 年 (1953)に描かれた天井画「雲竜図」がある。このような蕉琴の画業を顕彰するため、町内の 有志により馬場都々古別神社境内に「蕉琴先生筆塚」が建碑され、蕉琴を顕彰されている。

3)田山花袋

田山花袋は、明治・大正の自然主義文学を代表する作家である。花袋は、明治 19年(1886)から同 25年(1892)まで東白川郡長であった姉婿の石井収氏の住む本町を訪れている。その間、棚倉・塙などの名勝・旧跡を和歌として残している。宇迦神社の桜、長久寺暁鐘、桜清水など現在も存在する光景だけでなく、馬市や自然風景など現在では見ること感じることができない風景や場所が和歌の中に息づいており、棚倉町の明治時代の風景を知る上で重要である。現在、長久寺と蔵光寺には歌碑が建ち花袋の見た情景を和歌とともに楽しむことができる。

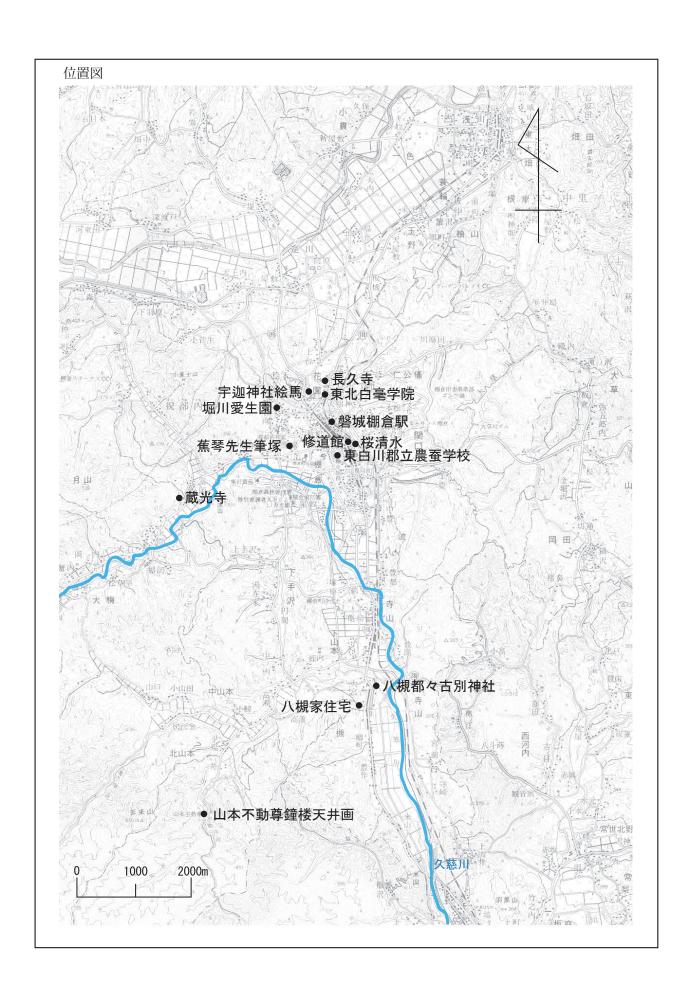


- 長久寺暁鐘
 - ほのぼのとあけゆく山に音すなり麓の寺のあかつきの鐘
- 北町桜清水

たたかひしことも忘れて真清水に花かけうかべみる世なりけり

関連文化財の構成要素

- ①鉄道の施設
- 1)白棚線…メガネ橋
- 2) 水郡線…磐城棚倉駅跨線橋、磐城棚倉駅倉庫、磐城棚倉駅待合室
- ②教育・文化
- 1)教育…修道館、東北白毫学院、東白川郡立農蚕学校、堀川愛生園
- 2)勝田蕉琴…宇迦神社絵馬、棚倉小学校所蔵「啐啄」、山本不動尊鐘楼天井画、蕉琴先生筆塚
- 3)田山花袋…八槻都々古別神社、八槻家住宅、長久寺、蔵光寺、桜清水など



(6) 伝承や物語

■ストーリー

当町には多くの伝説や伝承、昔話が残されている。例えば、「棚倉」という町名の由来について、第13代成務天皇の時代に白河の国造として赴任した塩伊乃己自直命の冠称からきているといわれている。塩伊乃己自直命は「屯倉」を造り、土地の人々に稲を教えた。古書においては「伊野に倉を設け穀を蓄え、春、開きわかつ。土民之を伊野の種倉という」と伝えられているが、この「種倉」が訛って現在の「棚倉」になったともいわれている。この他にも数多くの伝承や物語が存在し、それらを通して当町の歴史・文化を知ることができる。

① 宇迦神社の由来…(福井地区)

現在、棚倉町大字花園字鹿子山にある宇迦神社のおこりは、聖武天皇の時代、神亀年間(724~729)の頃であるといわれている。この頃、磐城の国飯野村(現在の棚倉町大字上台・玉野・福井)の信心深い若者が、神社を巡るため西国へ旅に出た。ある地で泊った際、若者は夢で白蛇の神霊にあい、東国のゆかりの土地まで連れて行ってほしいと頼まれ籠を預かる。目覚めた若者はお告げに従い帰国を急ぎ、苦労の末に今の福井の地に到着した。その夜、籠の中から神霊が登場し、ここがゆかりの土地であり、近くにある飯沼という沼のほとりに祀ってくれと頼んだ。翌朝若者がお告げの通り沼のほとりへ出かけると、白蛇は塩伊乃己自直命が建てた祠に入り込んだ。福井の農家の衆は若者からその話を聞いて白蛇を祀ると、飯沼の清水が湧き出し大きな池となった。それが今の大清水池である。その後大変な日照りがこの地方を襲ったが、その池だけは水が湧き続けていた。こうして宇迦神社の白蛇は村人の信心を集め、この里の守護神となった。現在も福井の神社跡地には、小祠堂が残されている。

② 大泥棒紋十郎…(寺山地区)

江戸時代、近隣に知れ渡る苗泥棒の紋十郎がいた。紋十郎は足の速さが有名であり、役人もその足の速さから捕えることができずにいた。村人たちは泥棒対策として、水田に栗のイガを蒔くなど苗を奪われないよう対策したが、それも及ばず紋十郎は苗泥棒を繰り返した。役人たちは交代で見張りを続けるなどを行い、とうとう紋十郎も捕らえられたのであった。

③ 創徳寺の化け猫… (寺山地区)

ある日創徳寺に野良猫が現れ、和尚が「トラ」と名付け飼っていた。季節が廻り冬になると狐の嫁入りがでるようになり、ある人が近くで見ると多くの動物たちが田んぼで大宴会を行っていた。その宴会のとりまとめ役は創徳寺のトラであると噂が立つと和尚はトラを寺から追い出し、和尚はトラの復讐に備える。ある夜、トラは寺に忍び込み和尚を襲うが、槍で一突きされてしまう。10年後、寺が修築されるとき、本堂の床下から動物の骨が発見されたのであった。



イラスト:木見尻郁弥

④ 蟹内の由来… (強梨地区)

八溝山のふもと、久慈川の流域に蟹内と呼ばれるところがある。昔そこでは、同じ時期に里人が何者かによって殺害される事件が起きていた。蟹のハサミの跡のようなものを遺していることから大蟹によるものだと村人は考えた。なぜならば村人は酒の肴として多くの蟹を殺しており恨みを買うことをしていたからである。このうわさを聞き付けた、八溝山の奥に住む椎名監物は大蟹退治を行う。お盆の16日に現れた大蟹は監物を襲いにかかるが、監物は矢を放ち退治した。このことからその場所は、「蟹打」と呼ばれいつしか「蟹内」と転化したのであった。

⑤ 不思議な徳利… (流地区)

現在常隆寺に安置されている十一面観音像は、行基作と伝わり後に入沢観音として多くの人々から信仰されてきた。江戸時代、酒屋にあるお爺さんが暮れ4つ時に小さな徳利に一升分求めることがよくあった。不思議に思った店の者がお爺さんの後をつけると入沢に入る山あいの道で消えてしまう。その後、お爺さんは現れなくなっただけでなく、後をつけた男は病気になり酒屋は破産してしまった。人々はお爺さんは酒好きの入沢観音の化身であり、酒屋に罰が下ったと噂しあったのである。



イラスト:木見尻郁弥

⑥ 白蛇を見た… (棚倉地区)

明治のはじめ、伊野下村にうすのろ庄 助と呼ばれる若者がいた。庄助は氏神様 の白蛇を見たいと思い、食べ物を断ち朔 日と十五日に参拝を続けた。秋祭りが大 雨になり中止になると、村人は白蛇を見 たいと言い出した庄助のせいだと考え、 彼を責め立てる。その後庄助は氏神様に 謝りに行った帰りに、氏神の化身である 白蛇にであった。そのとき白蛇は庄助の 信念を称えた。これ以降庄助は信念を抱 き続けまじめに働いたといわれている。



イラスト:木見尻郁弥



(7) 時の鐘回廊

■ストーリー

当町は江戸時代に棚倉藩の城下町として栄えた地域である。棚倉城は初代城主の丹羽長重によって築城され、関東と東北の境目にある城として、親藩・譜代の大名が治めた。4代城主の内藤弌信は城内に鐘を造り、朝夕に城下の人々に時を知らせたと伝えられている。町内には多くの神社仏閣があり、貴重な文化財が数多く遺されている。

蓮家寺の銅鐘は2代城主内藤信照が寄進したもので、江戸時代から今日まで巳の時(午前11時) を知らせる歴史的な鐘である。

明治・大正期の自然主義文学を代表する作家である田山花袋(1872~1930)は、青年時代に 姉婿の石井收が当時の東白川郡長を務めていたことから、当町を度々訪ね、町内の旧跡や名勝 を和歌に詠み「棚倉百勝詠歌」を残している。そのなかで、「長久寺暁鐘」「積雲寺暮鐘」と題 して鐘の音が響く棚倉の美しい情景を詠んでいる。

当町と埼玉県の川越市は、15 代城主松平康英が川越藩に国替になった縁から、友好都市の関係を構築している。城下町川越には多くの蔵が残り、街並みを見下ろすように「時の鐘」がシンボルとして建てられ、現在でも1日4回鐘を撞いて時を知らせている。当町は川越市との友好のシンボルとして棚倉の「時の鐘」を整備し、冬季には棚倉町商工会青年部によりイルミネーションが施され、町民の憩いの場となっている。

当町は、古くから生活の営みの中に鐘の音が存在しており、現在も時を知らせている。歴史 的な鐘の音と、新たに整備された鐘の音が新しい時を刻み、町民の生活に溶け込んでいる。

① 長久寺

宝永4年(1707)、棚倉城主太田資晴が母の本成院の菩提供養と、当地域に法華の道場を開く為、身延33世遠沾日亨を開山に迎え建立した。山門は棚倉城の南門を移築したもので現在棚倉城の建築物として唯一残る遺構である。本堂内に祭祀されている十一面観音像は神仏混合時代に馬場都々古別神社の観音堂に祀られていたものと伝わっているもので、山門の両側の仁王像、向拝の臥龍、獅子、獏の彫刻と共に、明治期の廃仏毀釈の折、打ち捨てられていたものを町民が哀れに思い当寺に持ち込んだという、町民のやさしさが垣間見えるエピソードが残っている。



境内には小笠原騒動に関わった小笠原栄七郎の墓や、明治〜昭和期に活躍した小説家田山花袋の歌碑があり、「長久寺暁鐘」と題して、「ほのぼのとあけゆく山に音すなり麓の寺のあかつきの鐘」と棚倉の朝焼けを詠んでいる。

② 積雲寺

棚倉町大字関口字愛宕平にある曹洞宗の寺院。田山花袋は「積雲寺暮鐘」と題して「山寺の夕暮れの鐘こえきけばことさらにこそさびしかりけれ」と八溝山の夕暮れを詠んでいる。



③ 蓮家寺

慶長7年(1602)、蓮池主水、糟屋弥兵衛が阿弥陀寺を建立し、後に両人の名をとり蓮家寺と名づけられた。2代城主内藤信照からの手厚い庇護もあり、慶安元年(1648)には時の3代将軍徳川家光より御朱印状を拝受するなど城下を代表する寺院として繁栄した。寛文12年(1672)の棚倉大火で全焼したが将軍の命により優れた霊験を数多く成した伝説的な僧として知られる祐天上人が復興に尽力し元禄年間(1688~1704)に本堂が、安永6年(1777)に冠木門、黒門、桜門の山門が完成。現在は桜門が残り、山門は彫刻が美しい2層の姿を有していることなどから、町指定文化財となっている。山門に掲げる「大泉山」の扁額は、水戸藩に仕えた著名な書家である関其寧によるものである。

蓮家寺の境内には内藤家一門の墓所、戊辰戦争で亡くなった棚倉藩士を弔った弔魂之碑などがあり、特に内藤信照より正保 4 年(1647)に寄進された銅鐘は国指定重要美術品に認定されている。毎日巳の刻(午前 11 時)に、念仏を唱える勤行を終える合図として鳴らされ、城下の人々はこれを聞いて昼食の時間としていたと伝えられる。





④ 時の鐘ポケットパーク

埼玉県の川越市とは、棚倉城 15 代城主松平康 英が川越藩に国替になった縁から友好都市とな り、友好のシンボルとして平成 15 年(2003)に「時 の鐘」を整備し、冬季には、棚倉町商工会青年部 によりイルミネーションが施され、鐘の音と共に 町民の心を癒す場所として愛されている。



⑤ 山本不動尊

大同2年(807)に真言宗の開祖である弘法大師空海が、湯殿山(山形県)へ新寺建立の行脚の道中、八溝山に住まう悪鬼を退治する為、岩窟に不動明王を祀り護摩壇を築き悪鬼を退散させた縁起を持つ山林寺院である。寺の一番奥にある岩窟には、鉄や木で作られた宝剣がところせましと立ち並んでいるが、それらは魔を断ち払うという不動明王の宝剣のご利益を願って古来より多くの人々が寄進したものである。

棚倉藩主からも厚い庇護を受け、12 代城主松平康爵が開運祈願の為寄進した石灯籠がある。 また、県立奥久慈自然公園に隣接し、渓谷に流れる清流に恵まれた、まさに秘境といった景勝 地でもある。

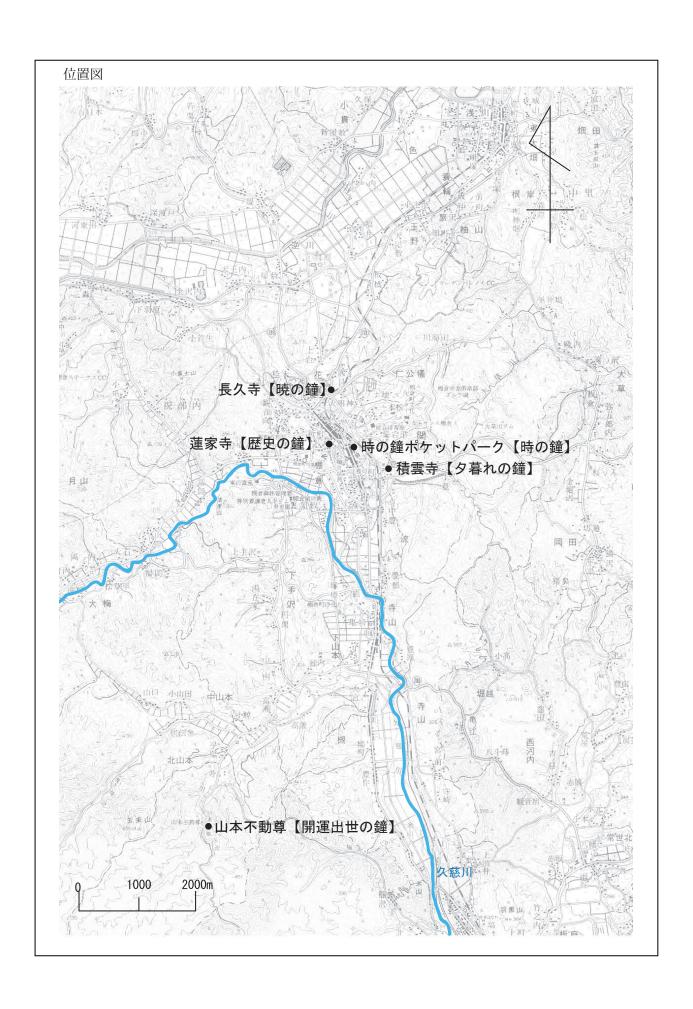
境内にある鐘楼には棚倉出身の画家勝田蕉琴の手掛けた龍の天井画があり、開運出世の鐘として町民に親しまれている。





関連文化財の構成要素

- ①鐘の音でつながる棚倉町の歴史文化
 - 1)長久寺【暁の鐘】 2)積雲寺【夕暮れの鐘】 3)蓮家寺【歴史の鐘】
 - 4)時の鐘ポケットパーク【時の鐘】 5)山本不動尊【開運出世の鐘】



第6章 基本構想実現へ向けた体制整備

本構想の推進にあたっては、文化財の所有者、地域住民、各種団体、行政などが協働・連携して取り組んでいくことが重要である。ここでは、各主体の役割、推進体制、今後の課題について整理する。

1 基本構想推進の各主体の役割

(1) 文化財所有者の担う役割

文化財を大切に保存し、次代に継承していくとともに、可能な範囲においてこれを公開する など、その活用を推進する役割

(2) 地域住民の担う役割

地域の歴史と文化に関心を持ち、触れることによって、文化財の価値を共有するとともに、 次世代への継承のため、維持管理や活用など、文化財を活かしたまちづくりへ積極的に参加する役割

(3) 各種団体の担う役割

様々な活動を通じて文化財の魅力を伝えていくとともに、維持管理活動への参加をはじめ、 文化財を活かしたまちづくりへ積極的に推進する役割

(4) 行政の担う役割

文化財の保存・活用の方向性を示し、調査研究を行い、文化財に対する意識の高揚を図るとともに、所有者等による維持管理や活用を支援するなど、文化財を活かしたまちづくりを推進する役割

2 推進の体制

(1) 地域住民や各種団体との連携

文化財の保存活用について、情報の共有化を図り、基本構想の内容を周知するとともに、地域住民や各種団体との連携・協働をすすめる。

(2) 文化財に対する理解の向上

文化財の魅力を伝えて行くため、職員及び地域住民に対して、当町の歴史文化について知り、 学ぶ機会を創出し、積極的な参加を啓発しながら文化財に対する理解向上に努める。

(3) 関係部局との連携

文化財に関わる国・県等の関係部局との連携した取り組みをすすめる。

3 今後の課題

(1) 構想の周知

構想の内容をわかりやすく解説するほか、学校教育や生涯学習の場で活用する等の取り組み を進すすめ、さらなる周知に努める必要がある。

(2) 保存・活用に向けた施策の明確化

本構想で示した方針に基づき、各種計画と整合性を図りながら、文化財の保存・活用を具体化及び実現するためには、その取り組み内容を明確化していくことが求められている。

(3) 構想の見直し・更新

今後の調査・研究により、新たに明らかになった場合等は、それらを本構想で設定した関連 文化財群として、位置づけることが求められており、時代の経過に伴い、社会環境や価値観の 変化などへの対応、文化財の保存・活用の取り組みの進展等により、本構想の見直しが必要に なることも予想されるので、一定期間経過後には、当町の振興計画の見直しなどに合せて、内 容の見直しや更新を図るものとする。

現在までの文化財の活用事例

現在まで棚倉町では、歴史文化基本構想の定義に基づき、指定・未指定に関わらず、文化財を幅広くとらえ、把握し総合的に保存・活用すべく、策定事業と同時進行で以下の事業を行ってきた。

◎「新棚倉藩物語―町まるごとミュージアム―」

棚倉町には数多くの文化財が遺っており、特に平成26年には「流廃寺跡」が国指定史跡へ、「馬場都々古別神社の本殿」が国重要文化財の指定を受け、町民が棚倉の歴史を見つめ直す機運が高まり、これを持続・発展させるべく、既存の地域資源をネットワーク化し、町全体を「まるごとミュージアム」とし、棚倉藩の城下町という歴史文化を活かして、新しい町づくりの一つの物語「新棚倉藩物語」を福島県地域創生総合支援事業(3カ年計画)として平成27年度よりはじめた。





☆町まるごとミュージアム制作のための調査研究

平成27年8月、山形県と山形市が出資して設置 し運営する公設民間方式の私立大学で地域貢献を重 要な事業としている東北芸術工科大学に基本的な情 報の収集、整理及び分析並びに本研究に必要な資料 の作成を依頼。平成28年3月、初めて町を訪問し た学生の目線から見た町の魅力を見出し「棚倉藩」 に関わる城や城下町、人々のネットワークに関する コンテンツを取り上げ解説した報告書を作成。図書 館前に絵看板も設置した。

☆「新棚倉藩物語―町まるごとミュージアム―」のPR で使用する初代藩主「立花宗茂」と初代城主「丹羽長重」のイラストを漫画家・イラストレーターの森美夏氏に委託し制作。



□「奥州棚倉藩評定―関ヶ原合戦からの復活―」

平成27年10月10日(土) 場所 棚倉町文化センター倉美館



■評定

歴代棚倉藩主の現当主やご子孫、所縁の方を招き意見交換を行い、「新棚倉藩宣言」を発表した。

■講演

棚倉藩を語るうえで欠かせない武将である立花宗茂と丹羽長重を中心に3人の講師にそれぞれの視点からの講演を行った。

「大徳寺と立花宗茂を含む戦国大名」 講師:京都大徳寺大慈院住職 戸田実山氏

「武将 立花宗茂」 講師:小説家 上田秀人氏

「「西軍」諸将の「関ケ原」合戦」 講師:九州大学大学院教授 中野等氏

■小説家対談 上田秀人氏×蓑輪諒氏

『孤闘立花宗茂』(中山義秀文学賞受賞)の著者・上田 氏と丹羽家の奮闘を描いた『うつろ屋軍師』(歴史群像 大賞入賞)の著者・蓑輪氏による対談。

■演舞 熊本城おもてなし武将隊

肥後・熊本より、歴史を駆け抜けた立花宗茂、小西行 長、島津義弘が参上。人気武将に扮した演者によるパ フォーマンス。



■民俗芸能上演

八槻都々古別神社楽人会による「八槻都々古別神社の神楽」(福島県指定)

- ○東北の小京都「棚倉」を楽しむ 1 泊 2 日の旅 平成 27 年 10 月 10 日(土) ~ 11 日(日) 東京と川越より、評定イベントと宇迦神社の秋祭り、町内の歴史的文化財を廻る町内散策を行うバスツアーを敢行。
- ○文化財展 平成 27 年 10 月 7 日(水) ~ 11 日(日) 場所 棚倉町文化センター 指定文化財等を展示公開



□「奥州棚倉藩評定~復活の城 赤館城と棚倉城~」

平成 28 年 9 月 24 日(土) 場所 棚倉町文化センター



■評定

歴代棚倉藩主の現当主やご子孫、財団法人立花 家史料館館長、京都大徳寺塔頭芳春院住職による ディスカッション。

■講演

大名への復活を果たした立花宗茂の赤館城、丹 羽長重によって異例の新規築城された棚倉城、こ の二つの城をテーマに講演。

「西国一の兵立花宗茂」講師:作家 童門冬二氏 「赤館城と棚倉城」福島県立博物館 高橋充氏

■民俗芸能上演

八槻都々古別神社楽人会による「八槻都々古別神社の神楽」(福島県指定)

■熊本城おもてなし武将隊による演舞

立花宗茂、加藤清正、黒田官兵衛、あま姫(清 正の娘で阿部家に嫁ぐ)に扮した演者によるパ フォーマンス。

○**棚倉藩大茶会** 平成 28 年 9 月 25 日(日)

伝統ある茶道を通じて人と人との交流や親睦の輪を広 げ、心豊かで潤いのある地域づくりに資するため、茶の 湯体験教室と、茶席を棚倉の寺社や茶室等で行った。

場所 棚倉町文化センター (茶の湯体験教室)

棚倉町茶室(茶席)

長久寺(茶席)

八槻都々古別神社(茶席)





○「東北の小京都棚倉 時代絵巻」

平成28年9月25日(日) 山本不動尊等を会場にコスプレ撮影イベント。

○城跡ウォーキング 平成 28 年 9 月 25 日(日)
「よみがえる築城のようす!」

丹羽長重が築いた棚倉城を訪ね、ウォーキング しながら大土塁や穴太積石垣、多門櫓などの解説 を受ける。

○ペーパークラフト教室 平成 28 年 9 月 22 日(木)

「立花家の金箔押桃型兜を作ろう!」

場所 棚倉町立図書館

○文化財展 平成 28 年 9 月 23 日(金) ~ 25 日(日)

指定文化財等を展示公開

場所 棚倉町文化センター

ルネサンス棚倉

城下町くらしの資料館(石安米肥店内)

○町なかで逸品展示 平成28年9月25日(日) 指定文化財も含めた棚倉にある寺社や個人蔵 の逸品(文書、美術品、資料等)をそれぞれの会 場に展示。



場所 棚倉町茶室 長久寺 八槻都々古別神社

○東北の小京都「棚倉」を楽しむ1泊2日の旅 平成28年9月24日(土) ~ 25日(日) 東京と川越より、評定イベントと棚倉城跡ウォーキングと大茶会に参加。

□棚倉町歴史講座~棚倉城跡の国指定史跡を目指して~ 平成 28 年 4 月 15 日(金)



■講演 場所 棚倉町町立図書館 「丹羽家ゆかりの城石垣を読む」

講師:東北芸術工科大学歴史遺産学科教授 北野博司氏

■報告

「丹羽家の城くらべ」~棚倉城・小峰城・二本松城~

報告者:棚倉城調查員 塚野聡史

□伝統文化体験教室 D O K I ☆土器 夏の古代体験 平成 28 年 7 月 27 日(水)、8 月 17 日(水)

先人たちの衣生活の一端を学び、伝統文化を体験 し、地域にある文化遺産に関心が高まるよう図る。 小学4年生から高校生まで

場所 棚倉町文化センター





□アートしちゃう「夏合宿」

平成28年8月24日(水)~9月4日(日)

近津地区の八槻都々古別神社を舞台に東北芸術工科大学芸術学部生の作品を展示し「歴史(文化財)×芸術」をコンセプトに開催。作品は、棚倉町に滞在し町の風景や実際に感じたものを題材として制作。地域住民と学生、文化財とアートとの交流事業。

□歴史講座 平成 28 年 11 月 26 日(土)



■場所 棚倉町町立図書館

「山林寺院史における流廃寺跡の意義」

講師:京都大学名誉教授 辰馬考古資料館館長 上原眞人氏

□ウォーキング 場所 流廃寺跡 平成 28 年 11 月 26 日(土)

流廃寺跡で解説を受けながらウォーキング。



□伝統文化体験

日本の伝統文化にふれる機会をつくり、意識の助長を 図るとともに地域にある歴史、文化財愛護の精神が高ま るよう実施する。

■いけばな教室 平成 28 年 12 月 25 日(日)

場所 棚倉町文化センター

講師:華道家元池坊教授 菊池由美子氏

お正月に飾る「生花(しょうか)」を中心に「華道」 を体験する。





■「能の世界」一般コース

一般コース 平成29年3月1日(水)8日(水)15日(水) 小・中学生コース 平成29年3月4日(土)12日(日)26日(日) 場所 棚倉町文化センター

講師:(一社)観世会 副理事長 山階彌右衛門氏

解説「能とは?」、謡(うたい)、舞(まい)の三回連続講座で 能を体験する。

□馬場都々古別神社本殿現地説明会

平成29年3月12日(日)

場所 馬場都々古別神社本殿

講師:工学院大学助教授 小林直弘氏

日本の伝統文化に触れる機会をつくり、意識の助長を図るとともに地域にある歴史、文化財愛護の精神高まるよう実施。



□「奥州棚倉藩評定~英雄たちの復活~」



平成29年10月7日(土) 場所 棚倉町文化センター

■評定

歴代棚倉藩主の現当主やご子孫、町長によるディスカッション。

■朗読舞台

葉室麟著「無双の花」 立花宗茂と誾千代 戦国 最強の夫婦





■対談

作家 葉室麟氏×(財)立花家史料館館長 植野かおり氏 2012年『蜩ノ記』で第146回直木賞受賞し同年立花宗 茂の後半生を描いた『無双の花』を敢行した著者と近代大 名道具の編さん事業に多く携わってきた立花家史料館館長 の対談。

■熊本城おもてなし武将隊による演舞

島津義弘、細川忠興、あま姫(清正の娘で阿部家に嫁ぐ)に扮した演者によるパフォーマンス。

○東北の小京都「棚倉」を楽しむ 1 泊 2 日の旅 平成 29 年 9 月 24 日(土) ~ 25 日(日)

東京と川越より、評定イベントと棚倉秋祭り、馬場・八槻都々古別神社、山本不動尊、棚倉城 跡等を見学。

□たなぐらのお宝文化財展 平成 29 年 9 月 30 日(土) ~ 1 日(日)

町内の8ヵ所に御朱印を設置し、参加者は御朱 印帳を片手に各所をめぐり、それぞれの文化財や 寺社宝物の展示と催事を 楽しんでもらうスタンプラリーイベント。





No.	朱印箇所	宝物・備考	催事・備考
1	馬場都々古別神社	本殿(国指定文化財)	御朱印
		木造大黒天立像(町指定文化財)	雅楽演奏
2	観音寺	玉室和尚ゆかりの根子屋観音	御朱印
3	長久寺	山門(棚倉城南門)	御朱印
			寺子屋・古文書
4	蓮生寺	鎌倉武士 畠山重忠の守御本尊	御朱印
			寄席
5	蓮家寺	銅鐘(国認定重要美術品)	御朱印
		山門(町指定文化財)	大茶会
6	西迎院	地蔵菩薩立像 (町指定文化財)	御朱印
7	八槻都々古別神社	水戸黄門の書状 (県指定文化財)	御朱印
		随身門、本殿(町指定文化財)	大茶会
8	まち工房たなぐら	勝田蕉琴展 (棚倉ゆかりの画家)	御朱印
			マルシェ
	棚倉町町立図書館	考古資料の展示 (棚倉式土器等)	総合案内所
			歴史講座
	阿部正備茶室	阿部正備茶室 (町指定文化財)	大茶会

○**歴史講座** 平成 29 年 10 月 1 日(日)

場所 棚倉町町立図書館

「棚倉藩事阿部正功の生涯」

講師:福島県文化振興財団主任学芸員 山田英明氏

○雅楽演奏 平成 29 年 9 月 30 日(土)

場所 馬場都々古別神社

「大正大学雅楽倶楽部による雅楽」

○寺子屋・古文書 平成29年10月1日(日)

場所 長久寺

講師:東北大学学院生 齋藤りぼん氏

○落語 平成 29 年 9 月 30 日(土)

場所 蓮生寺

「東北大学落語研究部による寄席」

○マルシェ 平成 29 年 9 月 30 日(土)

場所 まち工房たなぐら

「たなぐら小径マルシェ」「勝田蕉琴展」

棚倉有縁の有志による手作りアクセサリーやスイーツ販売。

○大茶会 平成 29 年 9 月 30 日(土)

場所 阿部正備茶室 蓮家寺 八槻都々古別神社

「棚倉藩大茶会」









□歴史講座 平成29年12月3日(日)

場所 棚倉町町立図書館

「流廃寺跡の歴史的価値」

講師:文化庁文化財調查官 近江俊秀氏





■ウォーキング 平成 29 年 12 月 3 日(日)

場所 流廃寺跡

流廃寺跡で解説を受けながらウォーキング。

□棚倉町歴史講座〜棚倉城跡の国指定史跡を目指して〜

平成 29 年 4 月 14 日(金)

■講演 場所 棚倉町町立図書館

「棚倉城跡の歴史的価値」

講師:福島県文化振興財団課長 飯村均氏

■報告

「棚倉城跡の調査概要」

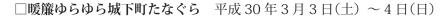
報告員:文化財調查員 塚野聡史氏

■対談

「甦れ!棚倉城」

丹羽家 18 代当主 丹羽長聰氏、阿部家 22 代当主 阿部正靖氏、歷史家 中西光雄氏

■古地図散歩 藩主のご子孫と城下町を歩こう 平成 29 年 4 月 15 日(土) 棚倉城歴代藩主のご子孫とともに城跡と周辺の文化財や史跡を巡り藩政時代を感じながら散策。



棚倉をイメージして制作した暖簾とひな飾りで新町通りから古町通商店街を彩ることで東北の 小京都を演出し、ディスプレイ化された通りを観光客が見て楽しめるイベント。

暖簾作成:東北芸術工科大学の学生

○**講演会** 平成 30 年 3 月 3 日(土) 場所 棚倉町立図書館 演題「和算法解説」

講師:福島県和算研究会事務局長 白岩信博氏

○映画 平成30年3月3日(土) 場所 棚倉町立図書館 アニメ「算法少女」上映会

主演声優:須藤沙也佳氏

○和楽器ミニ演奏会 平成30年3月4日(日)

場所 まち工房たなぐら

東北大学学友会邦楽部による和楽器の演奏会









□遺跡学習 平成30年2月7日(水)

場所 社川小学校

社川小学校の5・6年生対象に生涯学習課文化 財調査員が直接小学校へ伺い、身近にある地元 の遺跡のことを伝える特別学習を行なった。実際に社川地区で出土した石器、土器や刀剣など を教室に展示し、それをもとに古代からの営み・ 文化の流れや特徴、人々の暮らしをわかりやす く解説した。



□「棚倉戊辰戦争 150 周年記念シンポジウム」~ふるさとを愛する武士の心~

平成30年10月13日(土) 場所 棚倉町文化センター

■オープニングイベント 「上山藩鼓笛楽演奏」

上山市指定無形文化財 上山藩鼓笛楽保存会

戊辰の役の頃に上山城下でフランス式の軍隊調練を行った折に奉奏されたことに始まる軍楽 隊。当時の西洋式軍隊の姿を現代に表現した。

■基調講演 「奥羽越列藩同盟の多面性」

講師:東北大学大学院文学研究科学術研究員 栗原伸一郎氏

■パネルディスカッション 『戊辰 棚倉の戦い』

パネリスト:阿部家 22 代当主 阿部正靖氏、桜の聖母生涯学習センター講師 岡田峰幸氏、 土佐史談会副会長・高知大学非常勤講師 公文豪氏、声優 阪口大助氏







■文化財展示

戊辰戦争に所縁のある西郷頼母の著書や、大槻磐渓の書、棚倉藩の阿部正備、長州、薩摩、土 佐藩の文書、棚倉町民や藩士の当時の様子が分かる文書、新政府軍の錦切、肩印を展示した。

□「東北の小京都棚倉秋の文化財展、秋の大茶会、たなぐら F A C E 2 0 1 8」を、近津地区の文化財である、八槻家住宅、八槻都々古別神社、如意輪寺、山本不動尊で同時開催。

■秋の文化財展

平成30年11月10日(土)~18日(日)

八槻家住宅(県指定)で、八槻家所蔵の木造 十一面観音菩薩立像(国指定重要美術品)や、立 花宗茂、伊達政宗、石田三成、水戸光圀等から の書状や豊臣秀吉の朱印状「八槻文書(県指定)」 等の貴重な品を主屋棟へ展示した。

■秋の大茶会 平成30年11月11日(日)

八槻都々古別神社、如意輪寺、山本不動尊それぞれに茶席を設け、気軽に茶会を楽しんで、 当地区の文化財を身近に感じられるイベント。



■たなぐらFACE2018

平成30年11月11日(日)~18日(日)

東北芸術工科大学洋画コース.グラフィック デザイン科と地元住民を巻き込んだアートイベ ント。同時開催の他のイベントとも併せて、学 生が八槻地区住民の家に訪問し似顔絵を描きな がら文化や風習が学び、その似顔絵を展示し、 当日来場者への似顔絵サービスやわなげワーク ショップ、さらに学生が制作した八槻地区に因 んだ作品を八槻家住宅書院棟に展示した。



■だがしや学校

山形県内の学校の先生であった松田道雄氏が発案した地域活動で子供たちを中心に放課後や休祝日に地域で自分のお店(自分みせ)を出す活動。今回はアクセサリーのワークショップ等を行った。



●蛍の光音楽祭

「蛍の光音楽祭」は、卒業式等で歌われる唱歌『蛍の光』の作詞者「稲垣千頴」が棚倉町出身であったという、近年明らかにされた事実を広く紹介し、愛郷心を高めることを目的として開催し、平成24年、27年、30年と3回目を数える。

平成24年度 蛍の光音楽祭 9月23日(日) 場所 棚倉町文化センター

歴史家で稲垣千頴研究の第一人者である中西光雄氏による音楽祭の趣旨説明と実弟のシンガーソングライター中西圭三氏や、浪江高等学校音楽部、福島学院大学ハンドベルクワイヤによるコンサートを行った。



平成27年度 蛍の光音楽祭 1月31日(日) 場所 棚倉町文化センター

中西光雄氏による解説と、中西圭三氏らによるユニット「WA-OTO」、修明高等学校合唱部によるコンサート、及び「稲垣千頴と国学展」を行った。

平成30年度 蛍の光音楽祭 9月22日(土) 場所 棚倉町文化センター

中西光雄氏による解説と、中西圭三氏、修明高等学校コーラス部によるコンサートとラムゼイパイプバンドのバグパイプによる「蛍の光」の原曲「オールド・ラング・ザイン」というスコットランド民謡の演奏等を行った。

●大茶会 平成 28 年度~

他の催事と併せて、地元の茶道会や縁のある大学の茶道部を中心に棚倉町の寺社や阿部家由来の茶室などで茶会を催し、歴史的建造物の中で茶の湯という文化に触れ、それらを身近に感じてもらえるイベント。

●八槻家住宅の開放

平成30年4月より町民の文化活動を行う場所として個人所有の県指定重要文化財「八槻家住宅」を棚倉町教育委員会が管理運営のもと「棚倉町八槻家住宅」として設置した。現在まで研修や歴史講座、お茶席等で使用され町民の文化向上に役立っている。また、期間を設け八槻家所蔵の文化財を「棚倉町八槻家住宅」へ展示し一般公開を行っている。



〈参考・引用文献等〉

- ・棚倉町教育委員会編『棚倉町史 第1巻 通史編』棚倉町、1981年
- ・棚倉町教育委員会編『棚倉町史 第2巻 古代・中世編』棚倉町、1977年
- ・棚倉町教育委員会編『棚倉町史 第3巻 近世・町政編』棚倉町、1976年
- ・棚倉町教育委員会編『棚倉町史 第4巻 近世・住民編』棚倉町、1980年
- ・棚倉町教育委員会編『棚倉町史 第5巻 近代・現代編』棚倉町、1978年
- ・棚倉町教育委員会編『棚倉町史 第6巻 考古・文化財・民俗資料』棚倉町、1979年
- ・棚倉町教育委員会編『棚倉町史 別巻1 近世編・資料』棚倉町、1982年
- ・棚倉町教育委員会編『棚倉町史 別巻 2 近代編・戊辰戦争・明治維新』棚倉町、1982年
- ・棚倉町教育委員会編『棚倉町史 別巻3 東白川郡沿革私考』棚倉町、1982年
- ・棚倉町教育委員会編『田山花袋(録弥)棚倉百勝詠歌集』棚倉町教育委員会、1981年
- ・棚倉町教育委員会編『たなぐらの文化財』棚倉町教育委員会、1985年
- ・棚倉町教育委員会編『松並平遺跡―久慈川上流域における古代集落跡の調査―』棚倉町教育委員会、1985 年
- ・棚倉町教育委員会編『行政区ガイドブック』棚倉町教育委員会、1991年
- ・棚倉町教育委員会編『崖ノ上遺跡―霊園整備事業に伴う範囲確認調査―』棚倉町教育委員会、 1997 年
- ·棚倉町教育委員会編『流廃寺跡Ⅱ—13号平場発掘調査報告—』棚倉町教育委員会、1997年
- ・棚倉町教育委員会編『赤館跡―上台地区―』棚倉町教育委員会、2001年
- ・棚倉町教育委員会編『流廃寺跡金銀象嵌鉄剣科学調査報告書』棚倉町教育委員会、2003年
- ・棚倉町教育委員会編『東北の小京都 たなぐら 棚倉町歴史虎ノ巻』棚倉町、2016年
- ・棚倉町教育委員会編『棚倉城跡』棚倉町教育委員会、2017年
- ・棚倉町教育委員会編『国指定史跡 流廃寺跡保存活用計画書』棚倉町教育委員会、2017年
- ・棚倉町教育委員会監修『棚倉町歴史ガイドブック』棚倉町、2015 年
- ・福島県教育委員会編『福島県の中世城館跡』福島県教育委員会、1988年
- 白河市編『白河市史 第2巻 通史編2 近世』白河市、2006年
- ・白河市編『白河市史 第3巻 通史編3 近代・現代』白河市、2007年
- ・北茨城市史編さん委員会編『北茨城市史 上巻』北茨城市、1988年
- ・北茨城市史編さん委員会編『北茨城市史 下巻』北茨城市、1987年
- ・棚倉史談会編『たなぐら史談抄』ヨークベニマル、1997年
- ・棚倉町ふるさと興し会編『棚倉のむかし話』棚倉町ふるさと興し会、1989年
- ・棚倉町ふるさと興し会編『棚倉のお殿さま』棚倉町ふるさと興し会、1989年
- ・町史編さん係編『棚倉の民話と伝説』棚倉町教育委員会、1979年
- ・町史編さん係編『棚倉の民話と伝説 その2』棚倉町教育委員会、1982年
- ・棚倉町教育委員会社会教育課編『棚倉の民話と伝説 その3』棚倉町教育委員会、1987年
- ・平出美穂子『中通りの年中行事と食べ物』歴史春秋社、2000年

- ・中西光雄『「蛍の光」と稲垣千頴―国民的唱歌と作詞者の数奇な運命―』ぎょうせい、2012年
- ・棚倉町伝統文化活性化実行委員会編『棚倉藩と都々古別神社』棚倉町伝統文化活性化実行委員会、 2013 年
- ・金子誠三監修『白河』歴史春秋社、2015年
- ・棚倉町教育委員会編『棚倉城と棚倉藩』パンフレット
- ・「棚倉町指定有形文化財 阿部正備茶室」パンフレット
- ・「都々古和氣神社」パンフレット
- ・「大泉山寶池院 蓮家寺」パンフレット
- ・「山本不動尊」パンフレット

表紙イラスト:木見尻郁弥

棚倉町歴史文化基本構想

平成31年3月

発行·編集 棚倉町教育委員会

〒963-6123 福島県東白川郡棚倉町大字関口字一本松58

TEL 0247-33-0111

印刷・製本 ㈱タカハシ印刷

〒963-6131 福島県東白川郡棚倉町大字棚倉字新町85

TEL 0247-33-3784